



特277-808
76W10747

特277
808

◎天恩を奉謝し美談普及す
 ◎光恩を禮讚し健康増進す
 ◎精神總動員の大指針は本書なり

天光
 表忠 奮戦 の巻

◎事變突發して皇軍猛然として起ち
 ◎昭和の高山彦九郎いよく奮然
 ◎として帝都に起ち正々堂々活躍す

東京 天光 社 發行



始 ←

謹んで
 天皇陛下萬歳
 皇后陛下萬歳
 大日本帝國萬歳
 皇軍萬歳
 を高唱し戦時體制
 下の明治節を祝し
 奉る

草莽の臣
 天光社長
 正八位
 柴田外吉謹記



○明治節の歌

一、あじや ひがしひい とら
 亞細亞の東日出づる處
 聖の君の現れまして
 古き天地とさざる霧を
 大御光に照らすはらび
 教あまねく道明らけく
 治め給へる御代尊

二、めぐみなみだ やしまあま
 恵の涙は八洲に餘り
 御稜威の風は海原越えて
 神の依させる御業を強め
 民の榮行く力を展ばし
 外つ國々の史にも著く
 留め給へる御名長

三、あきそら きくかたか
 秋の空すみ菊の香高き
 今日のよき日を皆ことほきて
 定めましける御憲を崇め
 論しましける詔勅を守り
 代代本の森の代長へに
 仰き奉らん大帝

天光表忠奮戦の巻 目次

表紙	題名	意匠全部社長自身筆
口口口口口口	總題字	陸軍大將 林銑十郎閣下
口口口口口口	繪寫真	海軍大將 有馬良橋閣下
口口口口口口	繪寫真	明治神宮社頭の社長の英姿
口口口口口口	繪寫真	逓信大臣 永井柳太郎閣下
口口口口口口	繪寫真	宮城二重橋前の社長の奉祝禮裝姿
口口口口口口	繪寫真	明治天皇御製 子爵 三室戸敬光閣下
口口口口口口	繪寫真	皇軍必勝表忠記念會と社長社員の勇姿
口口口口口口	繪寫真	陸軍大將 鈴木莊六閣下
口口口口口口	繪寫真	東京市電春日町交叉点に於ける雨中の勇姿
口口口口口口	繪寫真	あどけなき少年時代の社長の學行
口口口口口口	繪寫真	父母の恩を偲ぶ社長の生家と其父子
口口口口口口	繪寫真	關東防空大演習中特に活躍せる勇士の面々
口口口口口口	繪寫真	意氣天を衝く陸軍の花形見習士官時代の社長の雄姿
口口口口口口	繪寫真	大元帥陛下御前講演者 歩兵中尉 角永敬次殿

76W10747



歴代天皇の御神靈に對し奉り皇軍必勝を祈願す	天光社本部	一
本社々則追加・表忠草		二
全國民に望む・出征軍人へ萬歲		三
軍歌日本陸軍(天に代りて不義を討つ)		四
天光道	天光社長 柴田外吉	五
皇室美談		一五
皇族美談		一七
表忠奮戰美談(壯烈鬼神を泣かしむ菊田大尉外二十美談赫々)		二〇
銃後美談(山内海軍中尉の母)		三八
本社正貫部即ち天光義勇隊の初陣、帝都の街頭に活躍す		四〇
表忠奮戰日記		四三
各方面よりの禮狀		六六
波瀾私の半生物語	社長 柴田外吉	六八
天光社々則		七八
贊助員及表贊意家芳名錄		八一
全會員に至急御願ひ		八六

勅語 (教育ニ關スル)

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良

ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰ス
ルニ足ラン
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ
俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外
ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德
ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

勅諭 五箇條 (軍人に賜りたる)

- 一、軍人ハ忠節ヲ盡スヲ本分トスヘシ
- 一、軍人ハ禮儀ヲ正クスヘシ
- 一、軍人ハ武勇ヲ尙フヘシ
- 一、軍人ハ信義ヲ重ンスヘシ
- 一、軍人ハ質素ヲ旨トスヘシ

明治十五年一月四日

御名

◎ 東亞の平和を御軫念
◎ 優渥なる勅語を賜ふ

第七十二臨時議會開院式は天皇陛下親臨の下に四日午前十一時貴族院において舉行され、左の如き優渥なる勅語を賜はつた

朕茲ニ帝國議會開院ノ式ヲ行ヒ貴族院及衆議院ノ各員ニ告ク帝國ト中華民國トノ提攜協力ニ依リ東亞ノ安定ヲ確保シ以テ共榮ノ實ヲ舉クルハ是レ朕カ夙夜軫念措カサル所ナリ中華民國深ク帝國ノ眞意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘ遂ニ今次ノ事變ヲ見ルニ至ル朕之ヲ憾トス今ヤ朕カ軍人ハ百難ヲ排シテ其ノ忠勇ヲ致シツツアリ是レ一ニ中華民國ノ反省ヲ促シ速ニ東亞ノ平和ヲ確立セムトスルニ外ナラス
朕ハ帝國臣民カ今日ノ時局ニ鑑ミ忠誠公ニ奉シ和協心ヲ一ニシ贊襄以テ所期ノ目的ヲ達成セムコトヲ望ム
朕ハ國務大臣ニ命シテ特ニ時局ニ關シ緊急ナル追加豫算案及法律案ヲ帝國議會ニ提出セシム卿等克ク朕カ意ヲ體シ和衷協贊ノ任ヲ竭サムコトヲ努メヨ

御名 御璽

昭和十二年九月四日

各國務大臣副署



(宅樺下閣郎十銑林 將大軍陸 臣大理總閣内前)

○ 備前長船の大刀秋空高く閃き地上の邪氣を清む



(秋季皇震祭明日治神宮參拜皇軍必勝祈願の代表最敬禮姿)

○ 社頭の秋晴に天光旗繡り鐵兜殿として空魔を防ぎ



(明治神宮司海軍大將 有馬良橋下揮毫)

○ 昭和の高山彦九郎十年一月一日より實行す



(姿装禮の長社るす唱高歳萬國皇室皇前橋重二城宮日祝節大四)

○ 正しき盡忠報國を大聲高唱すること熱烈無比



(毫揮下閣郎太柳井永臣大信選)

○ 出征軍人の歡送激勵、皇軍必勝の祈願、銃後國民の精神總動員、公德の普及實踐に今や正に出勤しつゝある天光社員の一部勇姿



(唱高歳萬軍皇室皇催開會念記忠表社本爲の願祈勝必軍皇)

○ 間口二間奥行四間僅か八坪の小社屋ながら、圖書取引店太洋社を經營して兵站部を作りつゝ

皇軍必勝表忠記

伊勢のふし

天光社

明治天皇御覽
 天光社
 伊勢のふし

(毫揮下閣光敬戸室三爵子)

(目回十八百三で之行實りよ月五年昨)

○ 時は正に戦時体制下場所は東京市電春日町交叉点 人は柴田天光社長 (十月一日寫す)



(つ立に頭街め固を身にルトーゲ皮り冠を帽水防)

○ 秋雨々中なも構はず公德中の生命線交通道徳を高唱する社長の勇姿

天光
社長の勇姿

(毫揮下閣六莊木鈴 將大軍陸 長會人軍 郷在國帝前)

(行學の長社の代時年少きなけどあ)

賞状

石川縣金澤市金澤高等
小學校生徒

柴田外吉

行狀善良學業優等ニ付

左ノ通賞與ス

明治三十五年十月二十日

石川縣

日本歴史譚 二冊

石川縣金澤市橋場町今成久七男

市立高等小學校児童

柴田外吉

明治二十年四月十日



品行端正能ク尊長ニ事ヘ

又能ク友誼ヲ修メ且風雨寒

暑ヲ避ケテ勉學衆ニ超ユ以テ

他童ノ模範トナス足ル

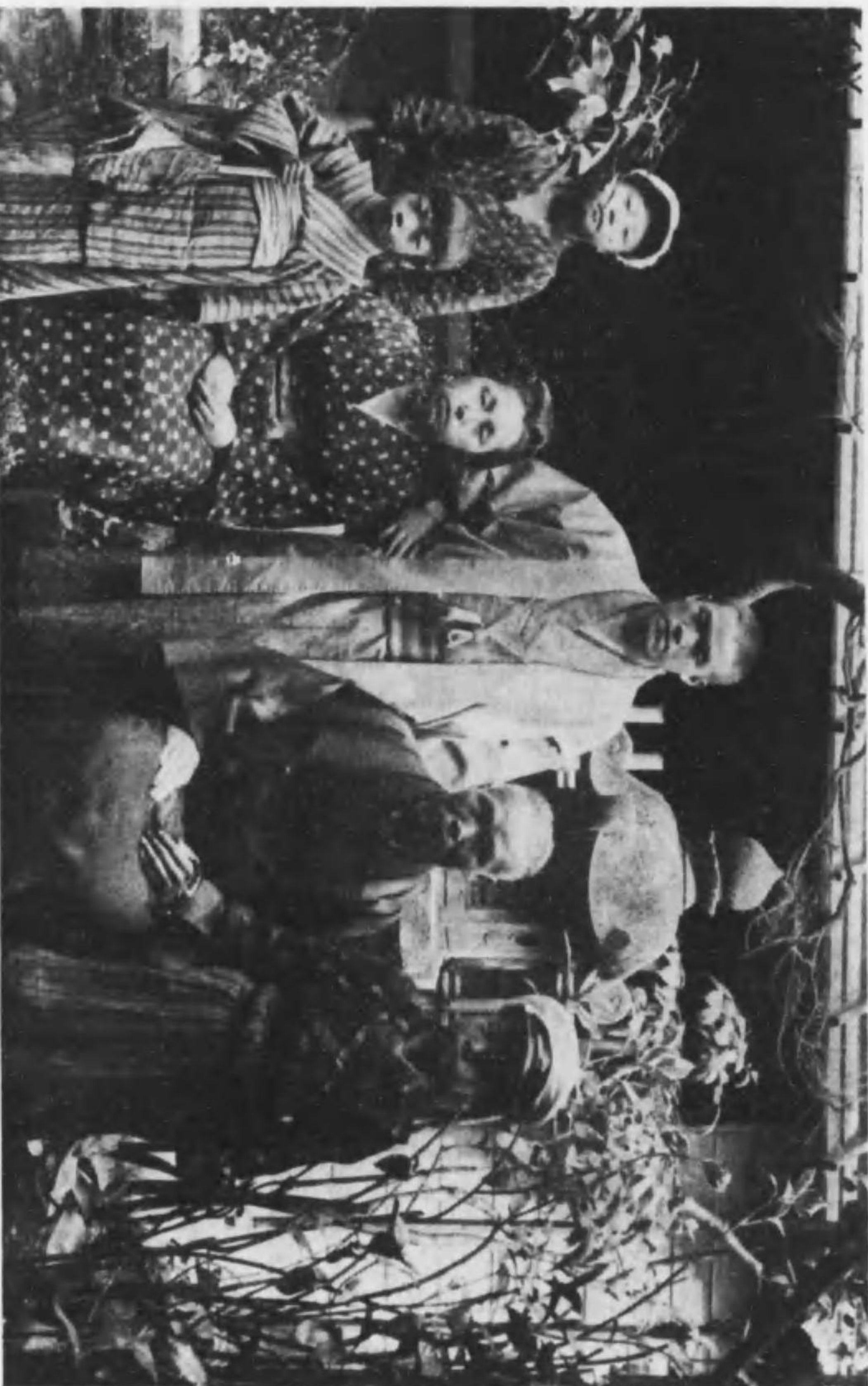
右殊勝ノ行為ヲ認定シ小學

褒狀會議ノ經テ之ヲ授與ス

明治二十年十月二十日 市立高等小學校校長 松本 頼

石川縣金澤市橋場町三十一番地 菅公幸藏 柴田久七ノ其家族
文具問屋

(父母ノ恩ヲ懷ビ生家、日露戰爭離る明治廿七年夏中庭にて)



(リナ家のリ隣南の店花子金の今) 屋家本日式澤金建附二間五十二行奥間五約口間 ○

(弱病は之) 子愛妹、三敬弟、井つか嫂、郎太政兄長、七久父、治留弟リよ右てつ向

(左端さ) き花の横下に菊花御紋章入赤瓦あり、由緒研究中なり
當時社長は十八才青雲の志を抱き帝都在留の爲列席せず)

○九月十五日より五日間關東聯合防務大演習に特に目覺しく活躍した本郷第五分團防毒班の勇士の面々記念寫眞



(士勇の岡鶴、森辻、井武、澤熊、田勝、田戸、木草高りより右列前)

○中列右より前島、村山、重富部長、近藤町會長坂井班長、岩崎副會長、鈴木、森、春山の勇士

(長隊勇義光天田柴は服軍兜鐵端左士勇の田山、貫小、隅三、林小、尉少柴、目人四りより右列後)

○北陸道の重鎮第九師團の中心歩兵第七聯隊舊金澤城頭遙かに日本海を隔て某國を脱む意氣天を衝く青年時代 (二十三才)



(委官士習見形花頃きし喧戰再露日た切張士將の軍全)

○發爲萬榮櫻
神必感至誠

凝爲百鍊鐵
人必貫目的

天必與正義
明治四十二年秋

○ 大元帥陛下御前講演者

本社特別賛助員



○ 石川縣野々市町

陸軍歩兵中尉

角永敬次殿

歴代天皇の御神靈と
護國の英靈に對し奉り
謹んで熱誠を罩めて

皇軍の必勝武運長久を
祈願す

昭和十二年十月十七日
神嘗祭日をトして
國旗を高く神風に
翻しつゝ

天光社本部

明治大帝の御神靈に對し奉り
謹んで誠意を罩めて
教育勅語の遵守實行を
誓ひ奉り

此超非常時下の精神總動員
完成を祈願す

昭和十二年十月三十日
教育勅語御發布記念日
を祝しつゝ

天光社本部

◎ 本社々則追加

○ 表 忠 章

第十一條 常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ其本業ヲ忠實ニ勵ミ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ光輝アル皇國精華ノ美ヲ發揚シ言行共ニ一般國民並ニ全人類ノ模範タルヲ示ス偉功拔群ノ方ニ表忠章ヲ贈呈シ永ク其名譽ヲ表彰ス

昭和十二年八月吉日

天 光 社 本 部



(參考) 表忠章創定の歴史

本章は太陽旭光の下に忠の唯一字を表したるものにて之は今を去る事二十六年前即ち明治四十四年五月八日
本社長柴田外吉が陸軍歩少尉に任官の際に新調せる軍刀の柄に忠の誠意を更めて鑲め明治四十四年五月八日
大正天皇陛下御統監の陸軍特別大演習に參加し部長として奮戦健闘し更に彼の大正十二年九月十一日
大震災の際には決死の覚悟にて身を以ては決死の覺悟を以て無事御影を奉安し更に彼の大正十二年九月十一日
突發せる空前の大不祥重大事件に際しては決死の覺悟を以て無事御影を奉安し更に彼の大正十二年九月十一日
は停止する(に)て非常警戒線を突破しては決死の覺悟を以て無事御影を奉安し更に彼の大正十二年九月十一日
下四名立會の下に皇運悠久を祈る爲天皇、皇后兩陛下、馬場先門に到り歩哨三名衛兵七名特別警備(全交通機關
令部、在郷軍人會、皇運悠久を祈る爲天皇、皇后兩陛下、馬場先門に到り歩哨三名衛兵七名特別警備(全交通機關
安泰を祈願せる等由緒ある紋章を今回我天光社の表忠章に應用せるものなり。

◎ 全國民に望む

昭和六年以來高唱されたる國際的危局はいよゝゝ其端を開きました。今や東亞の天地は戰雲の巷となり我忠勇無比なる將兵は猛彈烈風も何のその一死其本分を盡しつゝあります。天祐を保有し歴代天皇の御神靈と護國の英靈の加護ある我皇軍は必勝の意氣正に天を衝くの慨あり。此秋に際し銃後の國民としては一層國憲を重じ國法に遵ひ各自其本業を忠實に勵み、苟も怠惰浮薄に陥らざるやう特に戒心を望みます。若しそれ皇軍將兵の出陣等あらば熱誠を罩めて歡送且激勵に努め後顧の憂毫も無きやう協力せられ眞に舉國一致此空前の大難局を切抜け以て皇國精華の美を發揚されんことを謹んで熱望いたします。

◎ 出征軍人へ萬歲

我名譽ある出征軍人よ、各位は此重大事變に當り應召出征せらるゝの光榮を有す、日本男子として名譽何物か之に過ぎんや。總ての私情を捨て今ぞ義勇公に奉ずべき絶好の機會なり、後顧の憂は絶對無要なり、銃後には長くも天祐を保有し給ふ。大元帥陛下を始め奉り下一國民に至るまで九千萬同胞は熱誠を罩めて後援至らざるなし、勇躍堂々破竹の勢を以て出陣あれ大敵たりとも怖れず小敵たりとも侮らず一死其全力を盡して奮戦せらるゝやう銃後の全國民舉げて謹んで熱望し三度萬歲を大聲高唱す。

○日本陸軍○

- 一 天に代りて不義を討つ
敵呼の聲に送られて
勝すば生きて還らじと
- 二 或は草に伏しかくれ
萬死恐れず敵情を
肩に懸れる一軍の
- 三 道なき方に道をつけ
雨と降りくる弾丸を
わが軍渡す工兵の
- 四 敵とる工兵助けつゝ
敵を沈黙せしめたる
放つに當らぬ方もなく
- 五 一齊射撃の銃先に
鐵條網も物かばと
立てし譽の日章旗

騎兵

- 六 撃れて逃げゆく八方の
全軍残らず打ち破る
我乗る馬を子の如く
- 七 砲工歩騎の兵強く
百難冒して輸送する
忘るな一日遅れなば
- 八 戦地に名譽の負傷して
命と頼むは衛生隊
敵をも隔てぬ同仁の
- 九 内には至仁の君あまし
我手に握りし戦勝の
謝せよ國民大呼して
- 十 戦雲東にさまりて
輝く仁義の名も高く
光目出度く仰がるゝ

天 光 道

(其二)

天光社長 正八位 柴 田 外 吉 謹著

本 論

第二、天光道とは何ぞや

現代ことに非常時の我が國に於ける、最も權威あり
且つ直ちに何人も實行し得る中正思想、即ち天光道とは
歴代天皇の宏大無邊なる天恩の奉謝を經とし、太陽旭
光の高大無限なる光恩の禮讚を緯とする國民並に全人
類の幸福を計る千古不滅の皇國大精神、世界の大人道である。
歴代天皇の宏大無邊なる天恩の奉謝とは即ち明治
大帝の下し給へる教育勅語の遵守實行であります。

教育勅語は明治二十三年十月三十日に明治大帝御親ら吾々日本臣民に下し賜はりし千古不滅の大聖訓であることは申すまでもありません。而して其の内容も日本臣民中苟も義務教育を受けた者は、一人も残らず肝に銘じ深く熟知して居ること、思ひますから、重ねて其全文をこゝで申しませんが、其の中で最も重大であり且現代に最も痛切に一層遵守せねばならぬ事だけを聊か申したいと思ひます。

謹んで教育勅語を拜讀しますと

一 忠と孝とは我國體の精華である事
大君に忠義を盡し、兩親に孝行を爲すことは、之れ我國民道

徳中最も重大なる事でありまして、又人道としての根本精神をなすものでありますから、如何なる場合如何なる時と雖も常住座臥片時も忘れてはならない事であります。故に總ての教育の根本淵源は即ち此れより發するのでありますから此の點を十分心得るやう重ねて申して置きます。

二 智能を啓發し徳器を成就する事

學校の内外を問はず各方面に於ける夫々の智識技能を研究し應用すると共に、徳器即ち人格徳望を修養研磨し向上することを忘れてはなりません。之は恰も車の兩輪の如く如何に才氣煥發技能優秀の人と雖も、人格徳望に缺くる

ところがありましたならば其の人は忠良なる臣民と云ふ事が出来ないのであります。其實例は從來イクラもありませんから此の點を十分に心得るやう重ねて申して置きます。

三、常に國憲を重し國法に遵ふ事

大にしては國事を憂ふる國士より、小にしては市井の一匹夫に至るまで兎角一時の血氣に逸る人は悲憤慷慨の餘り國家の法律を犯してまで實行せんとする者があります。之れは十分に警めねばなりません。凡そ國家の安寧秩序を保つ爲には夫々必要の法律がありますから夫れを守り夫れに従ひ、如何なる場合と雖も落着いて冷靜に合法的に

實行せねばなりません。彼の有名なる五一五事件や二、二六事件の如きは此の點を十分心得て居れば起らなかつたと思ひます。

四、一旦緩急あれば義勇公に奉ずる事

戦争、事變、天災等一朝大事突發の際即ちイザ鎌倉と云ふ時には敢然として奮起し進んで難局に當り義は山嶽よりも重く、死は鴻毛よりも輕しと覺悟し、一死其本分を盡さねばなりません。平時に於て如何に良民らしく働いて居ても、イザ鎌倉と云ふ時に腰が脱けたり、卑法な振舞なごするやうでは眞の忠良な

る國民と云ふ事が出来ないのであります。此事は平素余程しつかりと修養鍛錬して置かないと、一朝大事突發に當つて、まごついたり狼狽したり、遂には心ならずも取返しのつかない大事を誤つたりしますから、呉れくも十二分に心得るやう三度注意して置きます。

五、教育勅語にある大聖訓は古今に通じて謬らず且中外に施して悖らぬ事

此の大道は古往今來永久に不滅のものであつて、而かも我日本ばかりでなく世界の全人類に對しても決

して變らぬものである事は、恰も太陽旭光の如く我國民ばかりでなく世界の全人類に必要缺く可らざるものと同様である事でありますから、正々堂々と如何なる時、如何なる場所と雖も遵守實行せねばならぬと心得るやう重ねて申して置きます。

太陽旭光の高大無限なる光恩の禮讚とは、太陽旭光を拜浴利用することであります。太陽は最も公平に平和に、遍く全世界に而も全人類にその光恩を永久且つ無限に與へつゝあります。而して吾等人類は太陽の光恩なくしては一日も生活するを得ない、これを

利用すれば何人も最も軽便に而かも明朗平和に健康増進することが出来ます。

先づ早朝日の出に向つて光度の強弱に應じて直面斜面横面する(こ)旭光を拜浴しながら深呼吸をしたり各種の体操例へばラヂオ体操等又は散歩したり各人の年齢強弱趣味に應じて適當に選擇すること又日出前に出勤するやうな人で其時間のない時は午食后其他の寸暇(五分でも十分でもよい)を利用して日光浴を行ひ次に衣服類特にシャツ、ズボン、靴下、腹巻、足袋等の如き直接肌につけるものは極力(例令僅かの時間でも)

日光にあてること(消毒と保温の利あり)寢具室内等も機會ある毎に日光乾燥すること而して公休日には可成郊外の清境を散策すること雨天曇天の時にも使用する人工的太陽光線機械はありますが之は相當有産階級のものですから只で利用出来る自然の太陽旭光の光恩禮讚こそ一般大衆向の健康増進法であります。更に各人の心持を太陽と同じやうに明かに朗かに平らかに和かに持つて常に平靜に暮し商談其他の談話の際相手方に接すれば客に好感を與へ萬事圓滿に平和に解決出来ると思ひます萬一不幸破談の時でも心は

イツモ平靜を保つ事が出来ますから、精神的に健康を増進する結果となるのであります………(つづく)

○著者曰く今後ますます〜重大点に
ふれますから、倦まずに根氣よく
愛讀且つ實行して下さい。

皇室美談

畏し大元帥陛下 嚴然として恩威ならび行はせ賜ふ

次に 皇后陛下 國母として將兵を御慈み賜ふ

また 皇太后陛下 有難き御言葉と御慰問品を賜ふ

誠に恐懼感激に堪へず

畏くも聖上陛下には北支事變勃發以來、御避暑も全然見合せ給ひ、酷暑の大内山でひたすら非常時の國務を繕はせられ殊に皇軍の奮闘する北支、上海の戦況奏上については刻々と地圖を御對照遊ばされ事變の推移に宸襟を悩ませ給ふと共に戦死者傷病者及び遺家族並に在留民に深く

大御心を垂れさせられ屢々側近者に御下問を賜ひ、また一夏二回にわたつて議會を召集されるのは空前のことであるが、過般の第七十一議會開會中においても内閣から毎日勅令、法律等の御裁可を仰ぐ多數の書類で御繁忙を極めさせられ、しかも何等の冷房装置なき御政務室へ、半

ドン、日曜日など晝夜の御區別なく出御遊ばさるる御精勵には奉仕者一同も感激申し上げてゐる、皇后陛下には去る五日北支に活躍し名譽の戦傷を受けた將兵に對し繙帶並に義眼、義肢を御下賜になり更に十八日滿洲事變、北支事變に關係する關東軍の傷痍將兵に繙帶を賜はる旨御沙汰あらせられた、この繙帶は陛下が女官達を督し給ひ、御手つから捲かせられたもので、陸軍省の吉田大尉が捧持し十八日午後九時東京驛發現地に向つた
また皇太后陛下におかせられても酷暑

の中に勇躍する在支陸海軍部隊の身上に御心を寄せられ畏くも將兵一同に對し有難き御言葉と御慰問品を賜はる旨御沙汰あらせられたので此日午後二時寺倉陸軍少將、近藤海軍大佐が御所に伺候し大谷大夫からそれ〴〵拜受した御慰問品は種々御配慮遊ばされた結果、忝くも多量の氷砂糖を御下賜あらせられたものであるが、このお心盡しのほどに將兵の士氣百倍すべく陸海軍當局は深き御仁慈に感激してゐる

昭和十二年八月十九日 謹記す
猛暑酷烈の頃

皇族美談

御重職の兩總長宮殿下

拜すも畏き御精勵ぶり

日支事變勃發以來すでに月余、北支に、上海に皇軍の武威無敵を誇る暴支膺懲の聖戦が展開されてゐる風雲の支那を遙に望みつゝ、陸海軍の大黒柱とも申上ぐべき閑院參謀總長宮殿下、伏見軍令部總長宮殿下の御精勵ぶりは國民齊しく恐懼し奉るところである

閑院參謀總長宮殿下には事變勃發の日より毎日午前十時までには御登聽あらせられて、御繁劇なる總長としての御決裁を明快に御與へ遊ばされて午後二時までは御退廳あらせられず、御晝食の如きも普通の將校と全く同様の一食金廿錢の兵食

をお攝り遊ばされてゐるのは畏き極みである、また御軍務を御處理遊ばされてゐるのは畏き極みである、また御軍務を御處理遊ばされる參謀總長室は參謀本部の二階南隅にあり通風装置も悪く、例年より十度も平均して暑熱の高い今年の夏などは一入きびしい暑さに、もし御老齡の御身體に御障りあつてはと側近の者から

扇風機と氷柱を御使ひ遊ばさるるやうお進め申上げたが殿下には御聴入れあらせられず、殊に若い將校たちがワイシャツ一つで執務してすら耐へ難い暑さにも拘らず殿下には御軍服のボタン一つおはづしにならず常に毅然たる御姿は感激の限りである、七十三歳の御高齢にも拘らず御公務に關しては殊に御嚴格で夜、晝の差別なく參謀次長始め關係當務者に謁を賜ひ過般南苑攻撃に際して御決裁を仰ぐべき事件が生じたのが午前三時といふ眞夜中であつた、め本部員は明朝の御決裁を御願ひ申し上げたところ殿下には直ちに參謀本部第一部長石原莞爾少將を召され御決裁を遊ばされ、『公務なれば如何なる場合でも遠慮せぬやうに』との有難い

御言葉まで拜し、これを拜聞した一同たゞ感涙に咽んだのであつた

伏見軍令部總長宮殿下

軍令部總長の御重職にあらせらるゝ伏見宮殿下の御日常につき八月廿日午後三時軍令部副官田中中佐から大要左の謹話があつた

軍令部總長宮殿下におかせられましたはわが海軍における最先輩にあらせらるゝのみならず、名實ともに海軍の中心をなされる御方でございますので殿下が御健康にあらせらるゝことは全海軍の衷心祈願する所であり例年ならば今頃は御静養を御願ひするのでありますが、本年はこの酷暑の候に毎日御出勤遊はさるゝ事は勿論、蘆溝橋事件以來日曜と雖も必ず御

登廳遊ばされますことは何とも恐懼に堪へぬ次第でございます、また御登廳になりますと或ひは重要事項の御決裁、戦狀の御聴取、澤山の報告その他の書類を御覽に供しますが、殿下におかせられましてはそのたくさんの書類をいちいち精細に御覽遊ばされますので御出勤中は寸暇もあらせられず新聞さへ御読み遊ばす御暇もなくしかも殿下の御室はその位置の關係上なか／＼暑い所で、他の部屋に比し平均二、三度高いので御座います、勿論上著などは一切おぬぎになられず、誠に畏れ多いことでございます、御退廳後も戦地より来る各種の報告はその都度私が持參し御覽に供しますが、時には夜遅くなつてから重要報告がありこれに對し速かに處置を要す御考へと遊ばさるゝ

場合は「次長等用があれば何時でも来るやうに」との御言葉がございます、これは深更拜謁を御願ひすることを遠慮しこれがため戦機を失することなきやうにとの有難き思召と拜察しただ／＼感激に堪へません、終りに一言つけ加へますことはこのたびわが海軍航空機が險惡なる天候ををかし長驅敵の首都はじめ各所の飛行場に見事なる爆撃を決行し、また上海の特別陸戦隊が十數倍に余る敵に對し勇戦奮闘よく現地を確保してをります時に當り、去る十七日朝殿下には畏くも明治神宮に御參拜の旨仰出させましたことは非常時局に當りわが國史上大帝の御神靈の御前に殿下が御參拜、御默禱遊ばさるゝ莊嚴なる御有様を拜し私は感激の極感涙滂沱たるを禁じ得ませんでした。

伏見宮博義王殿下の御奮戦

海軍省九月廿六日午前十一時半發表
伏見宮博義王殿下には第三驅逐隊司令として麾下驅逐隊を指揮せられ重要任務に御從事中のところ昨廿五日午後黃浦江を遡航中上海、日本郵船株式會社浦東棧橋付近の倉庫の中に據れる敵を發見攻撃中のところ、午後三時四十分頃敵彈のため畏くも御左手に御微傷を負はせ給ひまた部下に若干の戦死傷者を生じたるも倍々御奮戦竟に敵を制壓し當面の御任務を完了せられたり、殿下には御負傷後も極めて御元氣に渡らせら御引續き艦上において指揮をとれらつゝあり。

表忠奮戰美談

今回の事變突發以來我皇軍全將兵の壯烈鬼神を泣かしめ、懦夫尙威奮猛起せしむる忠勇美談は溢れて全部限りある紙上に載せられませんが、其二十を掲げ以て全將兵の忠烈を感謝し表忠の一端と致します。

◎激戦十六時間の後

群る敵陣に斬込む

壯絶・菊田大尉の最期

八月十七日正午ごろ租界東部のわが紡績地帶華德路方面に一個旅團以上の支那兵が突如租界の警戒線を越えて襲ひ來りわが軍の後方を脅かさんとしたのでわが東部警備隊菊田部隊長は直に部下を指揮、

敵と壯烈な白兵戦を展開した、わが軍は寡兵敵は我に數倍する大部隊を誇つて猛射を浴びせかけたが勇猛果敢なわが將兵は斷乎陣地を死守しつゝ、應戦死闘實に十六時間、今回の上海戦始つて以來の長時間の激戦を交へたが豪膽なる菊田部隊長は全員に陣地の死守を命じ自らは手兵を率ゐ身を挺して敢然蟄集する敵部隊の眞只中に躍り込み軍刀をふりかざして縦横無盡に斬りまくる敵兵の膽を冷やさせたがつひに敵の猛射を一身にあびて部隊長は壯烈な戦死をとげ手兵の幾人かもまた部隊長に殉じた、部隊長の決死の奮闘を目の邊りに見た菊田部隊は「われ等の部隊長を殺すな」と猛然敵兵に亂射を浴びせた隊長の殞れるを見るや憤然として陣

地を躍り出し敵陣に向つて果敢にも突撃を敢行、つひに敵の大軍を撃退、陣地を死守し得て部隊長の靈に應へたのたつた菊田三郎大尉は天光社長の郷里石川縣金澤市の出身、卅六歳、大正十三年七月少尉候補生、同十四年十二月少尉に任官、昭和二年十二月中尉、同五年十二月大尉となり昨年十二月東雲の砲術長から〇〇海兵團分隊長兼教官に轉じた前途有爲の青年士官である

兄弟とも大尉

菊田三郎大尉は金澤市早道町六五、故菊田梧一氏の三男で令弟志郎氏(三)も金澤一中卒業後海軍兵學校に入り同様海軍大尉で事變前は軍艦鳥海乗組であつたが現在上海に活躍してゐるといふ兄弟海軍大尉

の名譽の家である、
金澤市早道町の原籍地は他人の住所となつてゐる。

◎再度敵弾に傷つき

報告を口ずさむ

敵前上陸最初の犠牲者

下坂少佐の壮烈な戦死

○○部隊で最もその勇壯を謳はれ下坂少佐はわが第一回敵前上陸と、もにこれを指導しながら上陸、自ら先頭に立ち○○に向つて北進、途中敵弾のため負傷しながらも屈せず、豫定進撃地點の○○まで到着わが○○部隊の上陸據點を完成するや直ちに○○部隊長への報告のため○○に引返し、八月廿三日未明○○部隊長

に戦況を報告の刹那！敵飛行機がわが○○の上空を襲撃、猛烈な爆弾投下を敢行し、少佐はその弾片を受けて昏倒した少佐は昏倒後も苦しい息の下から部隊長への報告を口ずさみ續けて使命を達した瞬間、遂に名譽の戦死を遂げたもので、わが○○部隊の敵前上陸における最初のわが軍の犠牲である。

◎莞爾“わが事終れり”と

挺身・敵陣へ肉弾散華

高田部隊長の最期

○○部隊は固安方面に出動してゐたが八月廿日良郷西北板橋村に約十七ヶ旅の敵が山岳地帯に頑強に抵抗するを知り高田部隊長にこれが殲滅を命じた、高田部隊長は直ちに進發、門頭溝より迂回し雨に

荒された山間高地の悪道路に生の玉蜀黍を嚙りつゝ死闘を續け三平村を経て廿三日板橋村の前面に到着、部隊を展開せしめ自らは一ヶ部隊を率ゐて多勢の敵軍に猛烈な夜襲を敢行し敵に死者數百の損害を與へてこれを敗退せしめ同地を占據凱歌をあげた、ところが翌廿四日拂曉となり同軍陣地前面の眼と鼻とのところにそびえ立つ約一千メートルの山中に大部隊のあるを發見したが曉闇の中の事とて敵味方判明せず山間に雲集する鐵兜のみを見て友軍と思ひ込み感激の日章旗を打ち振つたのであつた、すると何ごとぞ、友軍と思つたは二千にあまる敵の大部隊で敵は高田部隊めがけて矢庭に迫撃砲、重軽機關銃を雨霰と浴びせかけわが方もこれに應戦、こゝに猛烈な激戦が展開された

が、敵は一千メートルの高地を利する二千の大敵、わが部隊は平地に散兵する僅の寡兵で戦況は刻々われに不利となり三時間にわたる曉闇をついての大激戦にわが方は一人倒れ、二人倒れ、全く苦戦に陥つた、高田部隊長はこれに怯まず軍刀を揮つて突撃また突撃、肉弾戦を續けたが遂に腹部に貫通銃創を受け今は最期と感じて部隊長は自分の周圍に倒れ殆ど全滅した部下の死體を眺めて悲憤の涙を抑へつつわづかに残る廿余名の部下に命じて重要書類等の貴重品を友軍に届けることを命じた、部下は隊長と運命をともにさせてくれと命を肯んじなかつたが部隊長の嚴然たる命令に涙を揮つてその場を離れた、これを見送つた高田部隊長はわが事終れりと莞爾たる微笑みを浮べて折

からさし昇る旭光のうちに遙かに東天を拜し

「天皇陛下萬歳」を三唱、自ら肉弾となつて敵陣深く突入壯烈極りなき戦死を遂げた、これを聞いた〇〇部隊長は鬼神をも泣かしむる高田部隊長の最期に感激部下の弔ひ合戦とばかり決然敵を殲滅すべく追撃中である

第二の軍神橋中佐ともいふべき高田志道部隊長は廿八期生、本年四十三歳、原籍鳥取市、現住所宮崎縣都城市で夫人との間に三男一女がある、剛毅沈勇典型的武人で剣道の達人として聞え部下から慈父の如く慕はれてゐた、また日蓮宗の信者として信仰厚く俸給の大部分は日蓮宗社會事業に投じてゐるほどで血あり涙ある武人であつた。

◎嗚呼!!挺身廿二勇士 新戰場空高く日章旗

八月廿三日未明黄浦江〇〇地點に上陸したわが陸軍部隊の敵前上陸に對し竹下少佐の指揮する海軍陸戦隊の決死隊はわが軍の上陸めがけて手榴弾、機銃、小銃を一齊に浴びせる敵陣へ挺身突撃、友軍のため上陸路を作り陸軍敵前上陸の貴い人柱を出し、殊に多數の負傷者を出した敵はすでに河岸から約二千メートルの地點まで退却しわが軍の猛烈なる進撃に頑強な抵抗を試みてゐる、迫撃砲、小銃弾がピューン／＼唸りを立て、飛んで來る、建物といふ建物はことごとく半壊、全壊の慘狀で砲弾と爆弾によつて蜂の巢のやうに穴があいた屋根には早くも秋空に高くへんぼんと日章旗が翻つてゐる、埠頭から廿メートルあるかないかの竹垣の彼方に敵の塹壕が掘つてあるがこゝからわ

が軍の上陸に對し頑強に抵抗を試みたのだ、敵兵の死體が二個塹壕の向うの途に朱に染まつて轉がつてゐた、死體を乗り越え幾條かの鐵道線路を越えると三階の煉瓦の建物の前に〇〇部隊長、〇〇部隊長などが作戦に余念ない、すでに倉永部隊はそれより一千二百メートルの最前線に出てをり續々援軍が前進中だ、待機中の兵は廿三日朝來の緊張に疲れてはゐるがとても張り切つて「やるぞ」の氣魄を見せてゐる、突然「天皇陛下萬歳」といふ胸を抉るやうな叫が聞える、皆んなさつと緊張した、振向くと一人の兵士が左眼を射貫かれて顔を真赤に染めて斃れてゐる流弾に當つたのだ、前線から盛んに流弾が飛んで來る、上陸したばかりで前

線にも立たぬ兵隊さんが小癩な敵弾につて斃れるほど氣の毒なことはないさらにこの日の最大殊勳部隊である〇〇部隊を訪ねるとみんなげつそり疲れてはゐるが重大使命を果たした満足の色がどの顔にも浮んでゐる、部隊長は「皆よくやつてくれたが多數の部下を失つて申し譯ない」と暗然とたゞ一語、丁度新戰場を朱に染め江南の華と散つた勇士の遺骸を戦友達が收容してゐる最中だといふ、埠頭の方に行くと同線からは二人の戦友に昇がれた勇士の遺骸がなほ續々運ばれて來る、鐵兜をどす黒い血痕で染めてゐる勇士もある、すでに血の氣を失つた拳を固く握りしめてゐるのもある、上陸した陸軍の將校が暗然と敬禮をもつて一つ／＼の英靈を迎へてゐる。

◎重傷屈せず前進號令

絶叫しつゝ、力盡く

壯烈 倉永部隊長の戦死

八月廿八日夜來敵は〇〇方面のわが軍に夜襲を行つて來たが倉永、鷹森兩部隊は奮戦、廿九日拂曉これを撃退した、倉永部隊長は同日午前四時半砲弾下に部下を指揮してゐたが敵弾のため胸部銃創を負ひ遂に壯烈な戦死を遂げた、倉永部隊長の戦死は後に續く全部隊將兵を憤激せしめ士氣はいよゝ／＼燃え上り第一線陣地を飛び越えて敵陣目がけて進撃また進撃、敵に殲滅的打撃を與へて皇軍の威武を遺憾なく發揮しなほも不眠不休で攻撃した

◎四十人まで數へたが

後は覺えぬ千人斬り

殊勳・和知部隊の夜襲

〇〇付近に上陸した〇〇部隊は先づ羅店鎮の敵を撃滅して爾後の作戦を容易ならしめんとし永津、和知兩部隊を並べて八月廿七日から攻撃を開始した、その日はまだ〇兵の主力を使用すること出來ず、敵前概ね二キロまで接近して夜に入つた、和知部隊は夜襲によつて韓宅付近を攻略すべく楊家宅付近から南進を開始し陸家村東側方面より有力な敵の攻撃を受けたので和知部隊長は全部隊に對し右側攻撃前進を命じ、自ら陣頭に立つて斬り込んだのでその側にある將兵は期せずして部隊長を傷つけまいと左右に蟻集し一發の弾丸をも射つことなく敵陣に斬込み當るを幸ひ難ぎ倒した、恒岡部隊長の如きは傳家の寶刀を振り舞つて手當り次第に斬まくり卅余名の敵を斬倒し、〇〇准尉は四十人まで數へて斬つたが後覺えないといふ猛烈さであつた敵はすつかり怖ぢ氣て

悉く羅店鎮の南方に算を亂して退却した、翌廿八日朝陸家村付近に遺棄されてあつた敵の死體は五、六百であつたが悉く斬傷、突き傷であつたのを見てもこの白兵戦の物凄さを想像することが出来る、廿八日〇〇部隊羅店鎮を占據するや和知部隊長は羅店鎮東北側付近の家屋に陣取つたが東南方周家宅、朱家宅付近の敵砲兵隊から盛に射撃を受けその家屋にも數弾が命中し屋根の半分は吹飛ばされる有様であつたが、部隊長は泰然として微動だもせず悠々刀を杖つきつゝ煙草を煙らせて指揮を續けた、上陸以來和知部隊長の豪膽振りは部下一同の敬服するところである、彈丸兩飛の中も姿勢を低く變へるでなし地物を利用して身を隠すことさへなく凛然刀を握つて部下の指揮を鼓舞し、部下は部隊長の姿を仰ぎ見て勇氣百倍するといふ有様である。

◎決死の空爆九たび

斧田君遂に散る

辭世に盛る報國一念

荒れ狂ふ颱風を衝いて猛進またまた猛進、敵陣に突入して砲煙彈雨の裡なくぐり或は敵軍の基地に殲滅的爆撃を行ひ或は群がる敵機を撃墜して支那軍を震撼せしめてゐるわが海軍航空部隊の活躍は世界驚異の的となつてゐるが、決死の空爆九たび、鬼神も泣く勇猛ぶりを發揮して報國の一念を辭世に盛り遂に護國の人柱と化した一航空兵曹の武勳は、永くわが戦史にその名を留めるであらう、去る八月廿七日第九回の南京空襲の際不幸敵弾のため壯烈な戦死を遂げたわが海軍〇〇部隊の二等航空兵曹斧田卯之助君(二三)は山梨縣の出身で足立區千住橋戸町五四ノ兄廣之氏方に寄留してゐた、斧田君は千壽高等小學校卒業後、銀座の日本研摩砥石會社に勤めてゐたが十八の歳海軍航空兵志願をして横須賀海兵團に入團した、廿七日空爆に出發の際認めた手紙が最後でそれには「戦闘は思ひの外激しく一機、二機と失はれて行く、死は覺悟の前だから思ひ切つた事をやる決心だ、明日はどうなるか分らない、この前の空爆の時も數十發の弾を機體に受けた」とあり、平常から「大君に命捧げし益良夫がなぞで惜まん今日の死出路を」と辭世の句を残し覺悟の程を示してゐた。

◎弾盡きて敵に嚙付く

全員血達磨の大激闘

凄絶・佐藤部隊の最期

八月廿八日激戦の羅店鎮戦線中で最も激戦に激戦を重ねた永津部隊の一部は羅店鎮の直前〇〇宅付近において蔣介石が股肱と特む陳誠の第十四師の有力部隊を相手に勇戦奮闘、同部隊幹部は部隊長佐藤勳大尉以下死傷多く將兵の戦死卅八名、負傷五十名に達したがこれに屈せず最後まで強硬に所期の作戦を完了した

即ち西原部隊は廿七日夜占據した羅店鎮北方の〇〇宅を死守するうち廿八日拂曉敵大部隊の逆襲を受け勇敢にもこれに反撃を加へんとして突入したが、西原少尉以下相ついで斃れ、部下は僅〇〇名を残すのみとなった、この報により佐藤部隊は午前七時から一時間に亘り空爆、砲撃の掩護の下に戦友の危急を救ふべく遮二無二葛進して敵陣に肉薄せんとする直

塚勝治一等兵等は

かくなる上は満足な御奉公も出来ぬ、萬一見苦しく敵の捕虜となつてはならぬと

銃口をわれとわが咽喉にあてがつて自ら引金を引き白虎隊の勇士に勝る悲壯な最期を遂げた、また武田光一曹長は部隊長たる橋本竹馬、渡邊准尉等が相次いで倒れるや自ら部隊長代理として指揮を取り部下の先頭に立つて突撃中敵の流弾のために頭部を粉碎されて壯烈な戦死を遂げ、さらに日ごろ永津部隊隨一の優秀下士官として知られた眞木磯一伍長も敵のクリーク間に肉薄しながら敵機銃に倒され青木克孝軍曹もまた敵の直前において腹部に二ヶ所まで貫通銃創を受けて戦場の華と散つたが、友軍の急を救はんと犠牲的精神をもつて敵陣に突入後は〇〇部隊長以下幹部戦友の仇を報すべく全員血だるまとなつて奮戦した同部隊の戦闘は壯絶鬼神を泣かしむるものがある。

前クリークに阻まれて敵の迫撃砲、手榴弾に斃れる戦友の屍を越えて生き残りの將兵が突撃を敢行すること二次、三次、十字砲火の下にクリークを泳いで敵陣に取りつき弾を射ち盡したため肉弾を以て打つて喰みつく勇士等があつたが、敵は羅店鎮方面よりの退却部隊、嘉定方面よりの増援部隊をもつてわれを挟撃、味方の幹部は〇〇部隊の高野軍曹がクリークの中にあつて九死に一生を得たもの、他は多く壯烈極まる戦死を遂げた、渡邊准尉は佐藤部隊長より一足先に重傷を負つて倒れるや今自分が重傷を受けて隊長を助けることの出来ないのは誠に済みませんと後方に收容されることを肯んぜず看護兵のすきを見て付近の木蔭に入り軍刀をもつて見事割腹、古武士の如き壯烈な戦死を遂げた生き残りの勇士達は傷ついた戦友を介抱しつゝ、交戦十時間、午後五時遂に羅店鎮南端に取りついで敵の弾雨下に数時間應急手當さへする暇もない味方の傷兵ともく悲痛な決意を抱いて占據地點を固守したがその際重傷の大

◎迫撃砲百余門を

河中に叩き込む

中村部隊長の斬り死

わが陸の部隊が敵前上陸地點を確保した八月廿三日、午後一時羅店鎮へ約二里半の道を中村部隊長の率ゐる部隊が突撃、約一萬の敵が蟻踞する羅店鎮の南方川の付近まで来ると橋の上を迫撃砲十二門を積んだ敵の軍用自動車がつてくる「それ！」と部隊長が重刀を振り翳し眞先に飛び出して忽ち五、六人撫斬りにして自動車諸共川の中に叩き込み、ついで来る奴／＼三時間に亘つて迫撃砲十二門づゝ積んだ自動車十數輛を河中に叩き込み阿修羅の様に暴れてゐるうち敵に感付かれ、約一千の敵に全く包圍された咄嗟に「ナニ糞ッ」と算兵の部隊が一團となつて敵陣突破を試み、大尉は血刀を振つて斬つた、この激戦で生還したのは僅准尉一、軍曹一、下士官六名のみだつた、この鬼神の働きをした中村部隊長以下の奮戦振りにはさすが鬼畜の支那兵も感動したらしく、彼等の常套手段である死體への加虐を控へて遺骸は全部そのまゝ兵營近くにちやんと並べてあつた。

◎猛男“タンク男”四人

敵三百五十を蹴散す

お土産に迫撃砲と爆薬車
戦史に未曾有の殊勳

九月二十五日正午頃保定から敵を追撃中の猪木部隊の澤村幸人軍曹(三)は森明上等兵、渡邊恒義、藤崎藤夫兩一等兵を連れ敵情偵察中、保定南方四里小章村で大迫撃砲四門、爆薬車二輛を有する敵砲兵約三百五十を發見、大膽にも僅か四人でこれに射撃を加へ敵陣に斬り込み忽ち敵兵十數名を斬り殺し、敵を撃退し見事に迫撃砲四門、爆薬車二輛を鹵獲し凱歌を擧げ猪木部隊長外一同を驚かせた、四名でかくの如き殊勳を樹てたのは○兵戦史上稀有のことで激賞されてゐる、

澤村軍曹は熊本縣球磨郡黒肥地村、森上等共は同縣天草郡御所浦村、渡邊一等兵は大分縣西國東郡田染村、藤崎一等兵は鹿兒島縣日置郡山村の出身である。

◎空の爆彈五勇士

噫・澁谷機の自爆散華

鳥谷部隊の澁谷中尉(四十七期生)は九月廿二日午後○時、○基地を飛び出し滄州より德州方面に退却中の敵軍を爆撃中、白頭鎮上空にさしかゝるや敵高射砲の一弾を浴び操縦の自由を失ふに至つたので同中尉は最早これまでと機首を敵大部隊の眞只中に向けて突入し自爆によつて群がる敵の大軍を突破殲滅するとともに自らも機體とともに炎々たる火焔に包まれて壯烈な戦死を遂げた

尙右の壯烈な戦死を遂げた澁谷機の搭乗者は左の如し
▽中尉澁谷熊吉氏(三) 高知縣高岡郡日下村字本

郷辰三郎氏四男、昭和十年九月任官飛行○部隊付となり操縦術に卓越した技能を有してゐた
▽曹長土生明男氏(三七) 宮城縣伊具郡藤尾村藤田二九番地三九郎氏息
▽軍曹番匠吉乘氏(三三) 富山縣射水郡二口村二口二一七九勇治氏息
▽上等兵高桑末留氏(三三) 愛知縣海部郡甚目寺町上條五九喜三郎氏息
▽上等兵山本重富氏(三三) 三重縣三重郡朝日村繩生二三孫藏氏息

◎三隊長相次いで戦死 血に描く不朽の戦史

月光の下、悲壯な水杯

九月廿四日朝、敵が最後の堡壘と死守する保定全面の陣地は三重、四重にトーチカが構築され、如何なる大兵力をもつても難攻不落と稱してゐたほどあつて敵の抵抗ぶりは廿二日午後四時稀城河第一戦敵陣攻撃以來の激戦で容易に突破することが出来な

かつた、○砲の掩護射撃により歩兵部隊は廿四日拂曉からこの保定前面六百メートル、平漢線沿線まで進撃したが、敵は數年にわたり構築せる幅五メートル、深さ四メートル、北門から東西へ繞らされた延長十數キロのトーチカ壘壕に重機關銃、高射砲を据付け皇軍の前進攻撃を狙ひ撃ちする、午前十時までに保定を占據せよとの命令、○部隊長は欣然として各部隊長に傳令するや○突撃決死隊を志願して出たものが川谷、鈴木、河合各部隊の將兵○○名であつた、未明皎々たる下弦の月を浴びて川谷勝美、鈴木爲男、河合定の三隊長をはじめ三部隊の決死全兵の別離の宴、生還を期せず悲壯なる最後の水杯がかばされた、敵前僅四百メートルの外壕に據つて死守する敵の猛射はいよゝゝ猛烈、その中をわが決死隊の勇士は砲兵の掩護も待たず進撃し、豪雨の中を突進した、バタ／＼倒れる戦友の屍を乗越え順次猛烈な拂曉戦が行はれ、廿四日午前八時五十分ごろ、川谷部隊長は無念や胸部を撃ち抜かれ「天皇陛下萬歳！」と叫んだまゝ絶命、續いて河合部隊長も全身

數ヶ所に敵彈を受けて戦死、鈴木部隊長は右腕と胸部に敵彈二發を受けながらなほひるます『進め〜』と指揮の軍刀を振り續けたが、力盡きてバツタリ高梁畑の中に倒れた、傍らの桂城千満人准尉は鈴木部隊長に假纏帶して『隊長殿、傷は浅いです、後方に下つて手當をしませう』と虫の息の同隊長を背負つて一步立ち上つた瞬間、憎や敵彈は桂城准尉の横腹を貫通し朱に染まつてどつと倒れ名譽の戦死をとげた。

◎貴志部隊長・肉弾突進

數十倍の敵兵を撃退す

皇軍の氣魄發揮・猛勇散華

八月十六日上海新公園付近の戦場で壯烈な戦死をとげた貴志金吾中尉(三七)は部隊の最先頭に立ち數十倍に余る敵兵の眞つ只中に躍り込み壯烈に奮戦つひに皇軍の華と散つたが、その勇猛果敢な戦闘ぶりや鬼神をも泣かす雄々しさはわが將兵の語り草となつてゐる、十六日午前九時過ぎ新公園北方持志學院付

近より八字橋の南方戦線に突如として敵の大軍約二

個旅が押し寄せて我に對し猛烈な砲撃を加へ來つたのでわが貴志部隊は敢然これに應戦したが我機銃小銃に對して敵は數十倍の多數に加へて野砲、機關銃を息もつかせず浴びせかけ甚だしい苦戦に陥つたが貴志部隊は殘虐な支那兵のため恨みを吞んで護國の鬼と化した故大山大尉の遺志を繼ぐ部隊である、憤怒に燃える亡き先輩の形合戦に軍刀のつかも折れよと握りしめた貴志中尉は「小癩な敵兵め！」ときつと齒を食ひしばつたと見るや怒號一聲自ら部隊の先頭に立つて増集する敵陣の眞つ只中に躍り込み當るを幸ひ薙ぎ倒し阿修羅の如き奮戦ぶりに敵陣は忽ち動搖したがつひに敵の集中する銃彈十數發を受けて「天皇陛下萬歲」を絶叫して壯烈な戦死をとげた、部隊長の戦死に憤激した兵は「隊長の敵」と更に力闘又力闘果敢な奮戦に算を亂して逸走する敵を追うてその陣地を完全に占據したのであつた、この戦場で敵兵の遺棄した死體數百、わが貴志部隊が如何に算兵良く衆を制したかを如實に物語つてゐた。

◎敵の地雷火數十個

掘り出して奪ふ

吉野大尉の猛勇振り

八月十四日夜來の虹口方面の激戦において天晴れ勇名を轟かせた豪勇將校——〇〇隊の吉野捷三大尉は事變勃發以來日夜を分たず上海各方面の偵察を行ひ幾多の貴重なる敵情報をもたらし十四日の戦闘には楊樹浦方面を馳驅、敵軍がひそかに敷設した數十の地雷火を發見、大膽にも自らこれを掘り出しトラツクに積んで持ち歸つたといふ大膽不敵な行爲をやつて退け、さすが勇士揃ひのわが陸戦隊もその豪勇振りにほめて舌を巻いたといふ。

◎砲車・果敢の突撃

木内少尉江南の花と散る

羅店鎮の西南馬橋に據つて頑強極まる抵抗を試みてゐた敵は九月廿三日つひに〇〇部隊によつて完全に撃滅されたが、わが軍馬橋占據の蔭に〇兵山内部隊

の勇敢な掩護美談がある、山内部隊の放列は羅店鎮を去る數千メートルの後方にあるが、馬橋の敵が頑強極まるのでこれを撃退中の〇〇部隊を掩護すべく九月廿一日朝九時過ぎ山内部隊の木内治夫少尉(徳島縣板野郡出身)は砲車一門と〇〇名の兵を率ゐて歩兵第一戦に進出を企てたが砲車を通す道もないので〇兵の援助で棉畑、稻田の中に壕を掘り砲車はその壕の中をガタリ〜非常な努力で前進、つひに敵前三百メートルの第一線に〇砲一門を据ゑつけた、敵は強固な援護壕に據るので遠くからの砲撃ではなが〜參らなかつたが三百メートルの近距離から正確な観測でドカン〜砲撃されるのだからたまつたものではない、この砲撃に大打撃をうけた敵は死に物狂ひとなつて砲車めがけて機銃小銃の一齊射撃をはじめて來た、アツといふ間もなく敵陣は指揮中の木内少尉にあつて少尉はバツタリ倒れた、兵はこの間勇敢に砲撃をつゞけつひに〇〇部隊の進撃のキツカケを作つたことは〇兵部隊の使命を完全に果したもので木内少尉の戦死は全軍を感激させてゐる。

◎遺愛の名刀に魂あり

見事・戦友の仇を討つ

俺は吉井大尉の身代りだと

群敵を走らす大音聲

九月六日淺間長之助少佐は吉井清之助大尉（高知市出身）松澤卯太郎少尉等〇隊將兵を率ゐて羅店鎮の前後線にあつたが、〇本部及び羅店鎮後方に敵の大軍が押寄せ奇襲を試みるべく畫策してゐる氣配があるので斥候を派して偵察せしめたが兵力は判明せざるも大掛りな陣地構築を施してゐるらしいとの報告に接したので身をもつて偵察しようと午後二時ごろから部隊偵察に赴き廣範圍に兵を派して進んで行くうち果して吳宅を中心に敵軍が〇〇を狙ふと同時に羅店鎮奪還の態勢をとりつゝあつたので機を逸せずこれを食ひとめるべく淺間少佐は全軍を叱咤して敵陣に突入した、忽ち肉弾亂戦となり吉井大尉は傳家の寶刀を抜き放ち指揮しながら眞つ先に突入してゐるうち敵彈を頭部に浴び味方を指揮せる姿を崩さず戦

撃、機關銃の掃射的となりながら、わが將兵決死的の奮戦は今回の戦闘最初の激戦で、陸戦隊本部を守るわが將兵は空に地上に殆ど休む暇もなく奮戦し数々の涙ぐましい物語りを残してゐる、殊に陸戦隊本部の屋上監視の重任を持つてゐた佐藤重人特務少尉は、砲彈、爆彈、機關銃の雨あられの下に屋上の寡兵をもつて血みどろになつて活躍してゐる中、敵の一彈が右腕および腰部にあたつて四邊を鮮血に彩りつゝその場に倒れ、部下のため病院に昏睡状態のまま運び込まれたが、軍醫の手術ではつと眼が覺めるとそのまゝ部下の引止めるのも肯かず「このまゝ死ねるものか」と臍を決して飛び起き、數名の部下に抱へられながら再び屋上に登つて惡鬼の如く荒れ狂ふ敵に向つてこれを全滅すべく部下を督勵した、しかし再び飛び来る敵彈のためその場に倒れ恨みを呑んで壯烈な戦死を遂げたのであつた、あゝ皇軍の花佐藤特務少尉、その死こそ不滅に輝く大和魂の權化であらう。

死したので淺間部隊長は兵に命じその勇壯なる姿をそのまゝとし敵彈飛び来る中に秋草を手折つて貴き遺骸に捧げ瞑目暫しの後吉井大尉の手にせる血に染つた日本刀をとり「この刀で御身に代つて仇を取るぞ」といひざま「おれば淺間じやない、吉井大尉だ、敵兵を蹴ちらせ」と大音聲に呼ばはりつゝ前面の敵陣地に斬り込みこれを撃退したが、第二陣第三陣の敵兵は〇〇集結の舉に出ようとしてゐるので「〇〇部隊は〇〇護衛の人柱だ」と叫んで果敢前線に立ちふさがり寡勢をもつて食ひ止めると四時間、この間〇〇へ敵狀を詳細に報告し敵の魂膽を傳へて奇襲の裏を掻かしむるに至つた。

◎壯烈あゝ皇軍の花

上海陸戦隊本部の屋上

佐藤特務少尉の最期

八月十四日敵の銃砲火的となつたわが陸戦隊本部の激戦ぶりは言語に絶してゐる、地上からする敵砲の集中、上空にへばりついて動かぬ敵機の執拗な爆

◎殊勳を語る彈痕七十

あつばれ少年航空兵

廿一歳の川崎航空兵曹

猛嵐風を冒しての八月十四日のわが「横瀬空爆」の精悍さには關係者何れも驚嘆してゐるが、中でも杭州爆撃に参加した三等航空兵曹大串均氏（二三）を機長とする〇〇機の勇敢にして沈著なる行動はわが無敵空軍の典型ともいふべきである、同機が杭州上空に到るや地上からの砲撃と敵戦闘機の猛射は雨霰の如く集中し忽ち大小七十發の彈丸を蒙り、飛行機の生命とする發動機一台と電信機を射貫かれ、使用不可能となつてしまつた、しかし同機は果敢にも敵機と空中戦を演じて二機を射落した上残りの發動機一個だけで「チンバ飛行」を行ひつゝ單機猛烈な嵐風吹きすさぶ海上を翔破、夜に入つて無事〇〇基地に歸つて來た、わが空軍の威力を如實に示した同機乗員の勇猛無比のこの行動は各方面から絶讚の的となつてゐるが、更に大串機につき海軍省で取調べの結果同機には三等航空兵曹川崎昇氏（二三）と一等航空兵山下陸夫氏（二三）とが同乗し相協力してよくこの大任を果したと判つた、しかも川崎三等航空兵曹は第三期少年航空兵出身といふので關係者は何れも感激してゐる。

◎燃ゆる愛機を挺して

猛然、敵陣地へ突貫

黄山南麓の華と散る

蒲地、和田兩兵曹

わが海軍航空部隊は八月十四日夜以來連日連夜各地の空襲爆撃に参加し勇猛果敢な奮戦をつゞけてゐるが廿七日またく海軍省へ大和魂の大爆撃ともいふべき凄絶無比なる『自爆戦術』の詳報がもたらされた、去る廿二日揚子江岸の堅固な要塞江陰の空襲に参加したわが〇〇海軍航空部隊〇〇機——〇〇所屬三等兵曹蒲地梅雄氏操縦、二等兵曹和田正氏偵察——は黄山南麓の軍需工場を爆破した際敵の猛烈なる防禦砲火を浴び、敵弾はわが機關部を貫き遂に火を發した、蒲地、和田兩兵曹は所詮生還は期すべからずと自覺するや沈著にも火を吐く愛機を立て直し、どうせ戦死するなら暴戻なる敵軍を冥土の道連

れにしてやらうと残る爆弾もろともに敵陣地目がけてまつしぐらに突撃した、蒲地機は地上に群がる敵兵の真只中に轟然と爆發、甚大な打撃を與へて壯烈なる戦死をとげた、去る十六日は蘇州爆撃の際南野海軍大尉の肉弾機あり、今またここに蒲地機の自爆戦術があり、これこそ大和魂の權化として絶讃の的となつてゐる蒲地梅雄氏は長崎縣北高來郡小長井村大字長里の出身で、昭和七年六月佐世保海兵團に入團、同九年十一月一等機關兵、同十一年十一月三等機關兵曹、同年軍艦名取、霞ヶ浦、大村兩〇〇隊を経て〇〇勤務となつた人、和田正氏は福岡縣朝倉郡竹田村大字平塚の出身で昭和六年六月〇〇兵として横須賀〇〇隊に入隊、同九年五月二等兵曹となり鳥海、霞ヶ浦、横須賀、大村各〇〇隊を経て〇〇勤務となつたものである。

◎荒鷲コンビ"火焰報國"

ガソリン函に突入

南野大尉と原兵曹長

八月十六日の蘇州空爆の際佐世保所屬南野安治大尉同乗、原輝光兵曹長の操縦する一機が敵弾にガソリンタンクを射ち抜かれ機は火焰に包まれ墜落しながら地上の敵兵の眞つ只中に爆弾を投下した瞬間燃ゆる愛機を山積された敵のガソリン函に突き當て壯烈な戦死を遂げた空の爆弾二勇士の武勇談の詳細が判明した、南野大尉及び原兵曹長は上海方面の空中戦で敵と渡り合ふうち見事二機を撃墜、ついで紹興付近の空中戦及び江灣鎮の爆撃に赫々たる偉功を立てた沈着無双の空の勇士で戦友間でもク荒鷲名コンビとつたはれ数々の勳功は等しく全空軍の羨望と驚異の的となつてゐるが、去る十六日の蘇州爆撃に當つては地上敵空軍及び積み重ねられたガソリンタンクを發見するや忽ち僚機を追ひ抜いて急降下爆撃を敢行敵の集中銃火の中を飛鳥の如く潜つて瞬く間

に多數の敵機に致命的打撃を與へた、所が敵の一弾は南野機のガソリンタンクを射抜き、瞬間愛機は火を發し最早や最後と知るや残りの爆弾を全部投下し終り一丸の火焰となつて山と積まれた敵のガソリン函めがけて激突し愛機と共にク荒鷲名コンビは江南の華と散つたのである、この空軍武勇談が一度原隊〇〇に報ぜられるや戰友達は「南野、出かした」「原、よくやつた」と抱き合つて男泣きに泣き兩勇士の靈を慰めた

南野安治大尉は福岡縣田川郡勾金村出身昭和七年十一月士官候補生、同九年三月海軍少尉に任官、同十年十一月中尉に進級、昨年末吳海軍〇〇兵から〇〇に榮轉した前途有爲の青年士官である、その操縦振りを傳へられた原輝光兵曹長は高知縣幡多郡下田町出身で昭和五年六月一日佐世保海兵團に入團した。

銃後美談

銃後國民の美談は澤山數限りなくあり、誠に心頼しく出征軍人は後顧の憂毫もなく、十分に其本分を盡す事が出来まして眞に美しい軍民一致の花が咲きました。其代表的の一例を載せます。

◎愛兒の戦死に感謝す 龜鑑、海軍中尉の母

海軍省が感激の發表

八月廿五日午後四時海軍省ではわか渡洋爆撃隊の尊き犠牲、〇〇航空隊付海軍中尉山内達雄氏(二七)の死を發表した、發表の文書は「八月十五日〇〇空襲決行後行方不明となれり」原籍長崎縣壱岐郡石田村大字筒城西二八三、現住所、長崎市新中川町六一、昭和三年四月神戸高等商船學校航海科生徒を経て昭和十一年六月任官、參考母、弟三人、姉一人、といふ無味乾燥な一枚の紙片であるが、この裏に本事變を飾る美しい「海軍將校の母」があつた、山内中尉

行方不明の報を郷里長崎で受けた母堂ヤス刀自は健氣にも廿五日次の手紙を海軍省人事局に寄せ、愛兒の戦死を悼しと感謝し、あとに取り残された母としての苦衷を披瀝してある、言々句句讀むものをして感泣、全海軍省内を泣かせた一文である、發表係の軍事普及部梅崎中佐も「俺も泣いた、全日本國民にこの母の心を傳へてくれ」と原文をさし出した

母堂の手紙

拜啓

〇〇海軍航空隊付山内達雄中尉儀〇〇空襲において歿せる旨の御通知壱岐郡石田村長殿より現住所宛御轉送を得正に拜承仕り候
あの子、光輝ある帝國航空士官として御奉公仕り候事を得決死もつて護國の鬼と化しゆるぎなき祖國の御爲に身命を捧げまつるを得候事寧く感謝にたへず候

謹みて彼の子既往の事深く厚く御禮申上奉り候
あの子は幼少の時より直く正しく清き心の持主にて武勇を好める性質なれば天にうくる大任あるもの

と信じ候て父は賤しき己が子なりと思はず
み國の御子なりとしていつくしみ養育いたし來りたる子に有之候

昭和九年祖國非常時に心を澄まし候て海軍旗のもとにはせ参り候時、すでにこの最期を明かに決意仕りをりたるものにこれあり候

天皇陛下萬歲

大日本帝國萬歲

大日本帝國海軍萬歲

戦死せる子、達雄に代り母やす謹みてとなへ奉る

ああ、老いゆく母

月の明るきをながめては泣かんとするか、花の香

ぐはしきをめでては惱まんとするや

あらず

首をあげて空ゆく飛行機を見よ

あれよあの機達雄永へに生きて在るよ

私尙男兒三人有之育て見守りつゝ、み國の御ため

にはげましめんといいたし候

達雄最期といへども帝國軍人としての面目はけが

さぬ性格に有之候故御心安く思はしめし下さいます

達雄母ヤス

謹み上

海軍省人事局 御中

以上の生々しき數多の忠烈無比の實例を執筆、印刷、校正するに際し感激の涙拭へども盡きず嗚呼忠臣軍民の精華千古に輝く。
(社長の感想)

◎社會情勢殊に公德不振を慨し俄に

▼本社正貫部の事業開始を繰上げ

▼昨十一月五日より實行す

▼先づ正義を貫く天光義勇隊を創設し

▼社長親ら隊長となり街頭に進出奮闘す

昭和十四年度より實行豫定の本社正貫部の事業は右の理由で俄に豫定を繰上げ昨十一月五日より開始す本社々則第二條第五項により先づ天光義勇隊を創設し社長自ら天光義勇隊長となり卒先街頭即ち市電春日町交叉点に進出し、公德中の生命線一步誤れば尊き人命を損する交通道德の普及實行を熱誠をこめて大聲高唱す、即ち車も人も信號を守らざれば交通安全を期し難きを力説し、聲を大にして一般大衆に現地講話をなし、實地に交通

整理を實行して見せ其必要不可欠なる事を指導す。其交通整理の順序は先づ通路の障害物即ち小石、板片、繩、鐵片、滑るバナ、の皮等雜多の物を掃除し、次に停止線の標識を正しくし然る後進め、止れの信號に應じて天光旗を以て一々合圖すると同時に大聲を發して「進め」「止れ」を知らしめ、其中荷車等の緩行車あれば特に「駟足」を以て速かに通過するやう教へ、小兒自轉車あらば左端を通るやう教へ、重き荷物を満載して引難き車

には後押をなし、或は特に諸車輻湊する時は相互の摩擦喧嘩を避くる爲「仲よく進め」と號令を以て圓滿無事通過をなさしむ。此「仲よく進め」の號令こそ隊長苦心体験の結果發明せる名文句と見え、皆和氣あい／＼喜んで好感を以て聞き喧燥なる街路に時ならぬ平和の氣漲り何れも信號を守り通る好成绩を收む。而して通行の歩行者には右の要領で一々合圖と注意を喚起し信號を守り相互に尊き生命の安全を計るやう聲を囁らして教へ、信號を知つて居乍ら故意に犯す者には十分に注意を與へ、夫でも犯す常習犯人は一般大衆の公敵に付不得止交番に突出し警官の手に委す、又全然信號を無知な即ちボット出の地方人、小兒、老人、外出稀な都會人等には一々交叉点の歩行法を教

へ其實行を確實にす。如此多忙の最中、電車案内や町名方向案内を依頼する者あれば一々之を教へる等一層の多忙を極む幸に隊長は東京に三十年間の居住者につき下手な車掌や、新參の警官よりも諸事精通し居り此点非常に大衆に満足を與へたり。かくして昨年五月十日より九月十日迄は連日本社執務時間後更に疲勞も忘れて毎夕約四時より六時頃迄出勤、風の吹く日も雨の降る日も、炎熱骨を蕩かす酷暑の日も構はず四ヶ月間は一生懸命に此聖戦に従事し或時の如きは自分ながらよくも身体が續くものと思ひし何んでもない之も大使命大目的の爲には何んでもないと自覺し自ら慰む、唯ドシヤ降りの大雨の時には被服全部下帯まで濡れ翌日の活

動に不便を感じたるを以て乏しき財布を
 はたき鐵兜を買ひ防水用コートを新調す
 其後社務多忙となりし爲毎日の出勤を變
 更し特に交通量の多き日丈出勤する事と
 し今年七月支那事變突發と共に出征軍人
 の出陣其他の爲に交通復雜を來せし爲再
 び連日出動し交通安全を計り以て銃後の
 國民の生命線を守る一助となしつゝあり
 服装も軍服武裝にて出勤する事も屢あり
 場所も春日町のみならず。内外人交通の
 中心地銀座尾張町や日本橋の交叉点や本
 富士署前へも一、二、三回多忙の寸暇を
 利用して出勤せる事あり。最初は世人冷
 笑する者多かりしも此頃では其尊き犠牲
 心の本意を認め相當感謝の念を持つ人多
 く隊長も大に満足し疲勞の慰めとす。尙
 最初の春日町交叉点は小石川富坂署の管
 轄なる爲同署の泉年夫部長（今は警部補
 に昇進榮轉）は態々禮を述べに來り又麻

布聯隊區將校團小石川分團長太田主馬少
 尉も態々感謝の辭を寄せらる。
 隊長出勤中は同所に於ける交通事故は殆
 んど無く大井に意を安んず、唯残念なる
 は信號無視する者の中、比較的女性殊に
 未來の賢母たるべき若き女と未來の國民
 の中堅たるべき學生に多きは意外とする
 所なり、學校當局の生きた精神教育を施
 すやう切望して止まぬ。

○參考昭和十二年十月一日迄の回数

- 一、春日町交叉点 三百八十回
 二、銀座尾張町交叉点 三回
 三、日本橋交叉点 二回
 四、本郷本富士署前 一回
 五、上野公園前 一回
 六、品川驛前 一回
 七、麻布歩三聯隊前 一回
 八、本所震災記念堂前 一回
 其他隨處一々と記さず略す。

◎ 表忠奮戰日記 (自昭和十一年四月
 至昭和十二年九月)

四月三日 神武天皇祭日に付例の通り式を行ひ盡忠報國を誓ふ。

四月四日 伯爵阿部正直閣下の贊助を拜す。

四月六日 此日快晴午前十時十分東京驛列車着にて凱旋の前關東軍司令官南次郎
 大將閣下を驛プラットホームに歓迎し、天光旗を高く萬歳を大聲高唱
 す。緒顔短軀肥滿の將軍の面上喜色漂ふ、列席者中廣田首相、寺内陸
 相、鈴木莊六大將、菱刈大將等の將星多し。

四月二十九日 薄晴、天長節（今上陛下第三十五回寶算三十六才）社長以下四名奉祝
 の式を擧げ、謹んで聖壽萬歳を慶祝す、午後一時半吉彦を伴ひ宮城二
 重橋前に至り天皇、皇后兩陛下、大日本帝國の萬歳を大聲高唱し最敬
 禮を行ふ、時恰も内外文武の大官等宮城より退出するを見る。

次に九段上の靖國神社に至り招魂祭につき護國の英靈に對し恭しく拜

禮す。白石寫眞館にて此日の記念禮裝姿の寫眞撮影す。

五月一日 此日快晴、本社々則第二條第二項に依り雜誌「天光」の製本出來に付内務省圖書課へ二部相添へ出版届を提出す。

五月五日 快晴雜誌天光を此日より發行す、部數は壹千部なり、先づ謹んで參謀總長閑院宮殿下、軍令部總長伏見宮殿下、梨本元帥宮殿下、東久邇中將宮殿下、朝香中將宮殿下、秩父少佐宮殿下へ献呈し次に廣田首相以下元老大臣大官各位其他へ五百部贈呈す。

五月六日 晴、雜誌發行後始めての賛助あり、大に感謝す、篤志家は石川縣野々市町郵便局長角永敬次殿なり。

五月八日 晴、第一師團の渡滿第一陣の出發を見送る、歩一の二大隊と師團司令部は午前九時三十四分發と午前十一時四十二分發列車を品川驛にて歡送且激勵す。之より先午前七時半宮城二重橋前に至り、皇室萬歳、第一師團萬歳を大聲高唱す。

五月九日 快晴、午前八時四十分赤坂歩一の營門前にて第二陣出發の渡滿兵を歡送萬歳を高唱且激勵す。

次に麻布歩三機關銃中隊員岩島正尙氏を訪ひ、雜誌天光を贈り激勵す同氏は本社賛助員田村德義殿の店員なり。

更に午前十一時四十二分品川驛に至り、軍用列車の發車を歡送す。連日の熱誠を罩めて特別拔群の大聲高唱の爲、社長の肉聲遂に嘖る。

五月十日 此日より天光義勇隊長として社長自ら天光旗を押立て毎日二時間位東京市電春日町交叉点に進出し、公德中の生命線たる交通道德の指導實行を開始す。

五月十七日 渡滿歩一聯隊長牛島大佐殿より禮狀着す。

五月十九日 財界一方の巨頭大川合名會社より賛助を受く。漸く本社の目的熱誠を認めしを喜ぶ。

五月二十二日 午前二時起床、社長以下三名麻布歩三の營門前に至り午前四時半出門

の渡滿軍の歡送をなす、更に品川驛に至り再同隊の歡送激勵をなし、尙第二旅團司令部の歡送をなす、軍用列車は午前七時十分發と午前九時三十四分發なり。

次に遠く澁谷驛に至り午前十一時五分發の木谷部隊の出發を歡送す

五月二十七日

五月雨蕭々として降る、本日海軍記念日なるも時節柄取止となる。

五月三十日

潮内務大臣閣下宛、地方長官各位へ著書天光道各一冊宛贈呈するやう依頼の件に關し照會す、然るに其後何の回答もなきは卿か不思議なり内相自ら正義を實踐模範を示すに非ずんば部下並に國民一般は心から各種の訓示を服膺せざらんと思ふ。午后二時半東郷元帥家へ行き三週年慰靈祭につき謹んで拜禮す、次に東郷小學校内の東郷室を拜觀し、各種の記念品を見て今更に偉功を偲ぶ、拜觀名簿に記帳し夕暮歸途に就けば少雨降り始め追憶の涙を催す。

六月三日

滿洲派遣河村本部隊長閣下より懇篤なる禮狀到着す。

六月十三日

郷軍本郷第七分會第二回總會に列席す。

六月十四日

午前九時半淺野長勳侯を訪問す、本人は誠忠の士ならんも取次者側近者の非禮沒常識には大に憤慨す、將來大に注意するやう特に戒告す。午後六時本郷元町小學校にて海軍軍事普及部古田中海軍大佐の講演あり、國際現勢と帝國海軍に就て約一時間半の熱演あり、昭和七年現在に依れば日、米海軍の彼我の實力は十對九、一余なりしが十一年末には十對八、二になり大に警戒を要するとの熱辨を振はる、終つて帝國海軍の精銳、赤道を越えて等の映畫あり盛會を極む。

六月十五日

午前九時半牛込區内の湯淺内大臣邸を訪問す、警官十名詰め居り、聊か物々し、社長は本社に興味に賛成を求めしも未だ理解なきか其意を得ず、君側者の重責果して十分盡すを得るや否や、稍心細く思ふ。

六月十八日

此日正午首相官邸内の警備兵一中隊引揚ぐ、二、二六事件後百十三日目なりと、如何に同事件の重大なりしかを知る。

六月廿七日 曇小雨、午前十時麴町區丸ノ内安田ビルと明治生命ビルにて防空演習の見學をなす、前者は六階の一室にて防火不十分、後者は屋上にて稍可なりの成績なり。午後三時防空宣傳行進あり、地上にては京橋小學校より日比谷公園まで、人と馬、犬の行列あり、午後七時本郷區元町小學校にて陸軍少將伊藤政之助の熱辨あり、空襲の危険と防空の必要を説き國民殊に婦人、小兒、老人の覺悟を促す、映畫爆撃大空軍外二点あり、盛會を極む。

六月廿八日 雨、本日は歐洲大戰開幕第一の記念日なり、即ち大正三年六月廿八日セルビアの一青年がオーストリアの皇太子に放つた一發のピストルに其端を發し遂に空前の大戦亂を捲き起し、我日本も日英同盟の約を守つて參加せり、當時社長は内心正義の觀念上加害者側の聯合軍に參加する理由に不可解を感じた、即ち被害者側オーストリア、ドイツ等の同盟軍に正義があるやうに思ひしが果して如何？。

七月三日 曇、永田中將殺害犯人元歩兵中佐相澤三郎の死刑執行あり、今更に當時の不祥事を慨歎す。

七月六日 雨、午前九時十分本郷區曙町、一木喜徳郎邸を訪問す一警部の日朝点檢に出會ひ警官十五名詰めかけ其物々しき警戒には聊か其理由を發見するに苦しむ、一警部は堂々自動車にて乗りつけ、社長は親ら自轉車にて來る、其對照實に妙なり、此家の取次者五回目の訪問にも不得要領にて如何に鈍物なるやを思はしむ。

七月七日 本郷區弓町三室戸敬光子爵閣下を訪問揮毫を依頼し快諾を得。

七月九日 雨、午前九時半、郷里金澤市の長兄政太郎氏死去の急電あり、社長は午後九時上野發急行列車にて出發す。

七月十日 午前八時十分金澤着直に上鷹匠町七の柴田本家を弔問す、社長は四男にて分家戸主なり。此日も雨降る。感慨無量、靈前に頷く。

七月十一日 小雨、午前十時告別式をなす、政太郎は明治十二年生れにて五十八才

なり、西泉火葬場にて荼毘に附す、哀愁更に新なり。天命なれば詮方なきもセメテ本社の大成を見て後の他界を望むや切なり。

七月十三日 晴、本家累代の墓地小立野の聞教寺を始め、姉妹の墓地並木町の淨明寺、野田寺町の高岸寺に至り墓參をなす、千萬無量、肉親愛の情、追憶更に新なり。

七月十四日 晴、身を清め出羽町練兵場内招魂社、及尾山神社へ參拜し、次に亡き父親の氏神椿原神社、社長出生當時の氏神久保市乙劔神社に參拜す。久振りの歸郷とて有名なる兼六公園、臥龍山、東山公園、犀川、淺野川、等故郷の山河を見れば昔若かりし時代の追憶吸めども盡きず、親戚、竹馬の友、母校の同窓生、歩兵第七聯隊在營當時の戦友の人々との會談に時の移るを知らず。

七月十六日 晴、急に猛暑となる金澤市九十五度東京九十一度を示す、名残りを惜しみながら、午後七時十五分金澤發急行列車にて歸京の途に就く。翌

朝七時上野着歸京す。

七月十八日 快晴、二、二六事件當時の戒嚴令本日をも以て解止さる、漸く明朗平和の時代となる。

七月二十日 晴、本日より二十四日朝まで東京、川崎、横濱三市連合防空大演習施行さる。

七月二十一日 晴、社長は在郷將校の軍服に武装し晝夜共警備の任に就き旁各方面を見學す。

七月二十三日 晴、午前九時子爵三室戸敬光閣下より御揮毫を拜受す、大に感謝す。此日夜一時まで警備に就く、防空の戦況目覺しきものあり。

七月二十四日 午前中は雨、午前五時防空演習終了す、此間社長は天光義勇隊長として警備と交通を擔任し、社員は防護團員として活躍す。

七月三十日 晴、明治天皇例祭日につき午前九時明治神宮に參拜す、酷暑にも不拘代々木練兵場にて陸軍の部隊教練あり。

八月四日 滿洲派遣湯淺部隊長殿より禮狀到着す。

九月四日 午後二時上野不忍池畔にある國体宣揚博覽會を観る、國体館、皇軍館寶物館等を巡覽す。何れも參考資料として貴重なるもの、中にも寛政の三奇人の一人勤王の武士高山彦九郎正之氏が京都三條大橋の上にて皇居を伏し拜む實景あり氏は、上野國新田郡の人正四位を贈らる其狀景恰も社長が二、二六事件當時宮城二重橋前方に於ける皇運悠久を祈りし時の實景精神と酷似し、一層深く注視、感慨無量なり、社長は在郷將校なるも不幸未だ實戰に参加するの機會なく唯内地にありて盡忠精神を鼓吹するの立場は丁度高山氏と相通するもの、如く、我大先輩に目の當り奇遇するの感あり、明治大帝の御製「國の爲心盡し、高山のいさほもなしにはてしあはれさ」昭憲皇太后の御歌「なからへて今世にあらば高山の高きいさはを立ましものを」を賜はる、地下の高山氏無上の光榮と稱すべし。尙同博覽會は本社表賛家三室戸子爵閣下の會

長なり、其他神武天皇の御東征、和氣清麿の誠忠、楠正成の盡忠、北條時宗の報國、東郷元帥の偉勳等あり、實に其意義深く夕暮迫る頃歸社す。

十一月三日 明治節につき例年通り宮城二重橋前と明治神宮に到り謹んで奉祝奉拜す。

昭和十二年 創立第三年を迎ふ、恒例に依り二重橋前と明治神宮に到り謹んで奉祝奉拜す。社業も一歩／＼前進するを得、更に本年は勇往邁進する決心をなす。

一月廿一日 帝國議會に於て寺内陸相と濱田國松氏代議士との間に軍部事件に付論争あり、滿天下注視の的となる。

一月廿二日 軍部の主張する解散論を中心として、閣議統一を欠き議會に對し二日間の停會を命ず。

一月廿三日 午後五時、廣田内閣總辭職す。

一月廿五日 午前一時、陸軍大將宇垣一成に大命降下す。

一月廿九日 午前十一時四十分。宇垣大將は大命を拜辭し、此内閣は流産となる、午後十一時二十五分陸軍大將林銑十郎に大命降下す。

一月三十日 午後一時、社長は本社表賛意家林大將の自宅澁谷區千駄谷町二丁目四八〇に行き、大命降下の祝辭を述べ且組閣完成を祈る、間もなく組閣本部は四谷區霞丘十五横山別邸に移され、本格的組閣に着手さる。

二月二日 雪后雨、午前十時二十五分林内閣成立親任式舉行さる、

首相、兼外相、文相

林 銑 十 郎

内相

河 原 田 稼 吉

藏相兼拓相

結 城 豊 太 郎

陸相

中 村 孝 太 郎

海相

米 内 光 政

法相

塩 野 季 彦

農相兼遞相

山 崎 達 之 輔

商相兼鐵相

伍 堂 卓 雄

右各位へ祝文發送す

社長の郷里石川縣金澤市より林、中村、伍堂の三人六大臣出で恰も加賀百萬石内閣出現の感あり大に祝す。

二月十一日 紀元節例年の通り謹んで奉祝奉拜す。

四月二十九日 天長節恒例の通り謹んで奉祝奉拜す。

七月七日 突如北支芦溝橋畔に於て、日支兩軍衝突し、東亞の天地戰亂の端を開く。

八月十三日 晴、九十度一、午前九時十五分上海に於て彼我兩軍遂に衝突し、我陸戦隊大に戦ふ。

八月十四日 晴、九十一度午後六時四十五分、昨年之二、二六事件背後關係判決發表さる、

死刑 首魁 北 輝 次 郎
同 西 田 稅
無期禁錮 謀議參與 龜 川 哲 也
禁錮三年 諸般の職務に從事 中 橋 照 夫
午后海軍航空隊は上海に於て、猛然奮起し要地を爆破、敵機を撃墜する等大に活躍す。

八月十五日 晴、九十一度、午前一時半我政府は遂に穩忍を捨て、支那軍を斷乎膺懲するに一決す。

我海軍航空隊は敵の首都南京其他を爆破し心膽を寒からしむ。

八月十八日 晴、九十三度、正しき盡忠報國の精神總動員の爲本社今回表忠章を創定し先づ二十個出來す。(別項卷頭參照)

猛暑烈風も何のその我皇軍は一死其本分を盡しつゝあり、感謝に堪へず、先づ皇軍へ萬歳を大聲三度高唱し、尙銃後の一般全國民へ望む文

章を卒先街路に掲出す。(卷頭參照)

八月廿一日 晴、九十一度、屋外は百度以上、本日は社長亡父久七の祥月命日につき特に厚く禮拜す。

午前十時社長は鐵兜、双眼鏡、水筒に備前長船の軍刀を佩き天光旗、天光章、天光褌、新制の表忠章を佩用先づ宮城二重橋前に至り部隊長としての最敬禮(軍刀を抜き放ち捧持して更に斜右下に下す)をなし徐ろに天光旗を打振り乍ら、皇室萬歳、皇國萬歳、皇軍萬歳を大聲高唱す、時恰も上海陣の宮本武藏現るの報あり、即ち東部右翼最前線柴田部隊(社長と同姓)の兩勇士讚井、迎兩兵曹長は群る敵の眞只中に飛込み二十名の支那兵を西瓜斬りにし敵を撃退すと、次に東京驛に行き出征兵の歡送激勵に努め、驛長天野辰太郎氏を訪ひ連日の多忙を慰む、更に内外人交通の中心地たる銀座尾張町の交叉点に現れ此際國民は一層公德就中交通道德遵守實行の急務なるを説き乍ら身を以て約二

時間交通整理をなす、猛暑其極に達し（支那の戦線以上の熱度屋外は百度以上は十二分にありと認む）鐵兜下より流るゝ汗はさながら瀧の如く、全身汗みどろとなり、止め、進め、駆歩の大聲號令は恰も戦場の散兵線を思はしめ、意氣正に天を衝くの慨あり、更に進んで大東京の中心地日本橋交叉点に至り同様活躍約一時間半、歸途白木屋に於ける北支事變展覽會を見る（社長の鐵兜武装姿を見る一般國民は展覽會以上の興味と參考を得て大に精神動員をなすやに見受けたり、かくて夕暮迫る頃歸宅せるも些の疲労なく我乍も士氣の旺盛と健康とに自信を得たるに驚く。

八月廿二日

晴、九十七度二、本年最高の猛暑なり、出征軍人の歡送激勵に努め、上野驛、春日町其他を巡廻す。

八月二十三日

晴、八十八度、早朝我陸軍は上海に敵前上陸を敢行し、海、陸、空軍協力して支那軍を壓倒す、

杉山陸相は可及的速かに終局する目的の爲、積極的軍事行動を起し敵の長期作戦に斷じて乗らずと聲明す、此日午前九時半より正午迄防空査閲訓練あり、社長は軍服に武装して見學督勵且慰問に努む、成績稍可なり。

八月二十四日

晴、九十一度、社長は天光義勇隊長として連日の武装奮勵せる爲、大刀の刀帯は其重みにてブツリと切れ、本日新に頑丈の刀帯を買求む、其奮戦振り思半ばに過ぐ。

京城要地は常時防空管制を實施し、廣島は防空告諭あり、いよ／＼戦雲は内地に掩ひかゝらんとす。

八月二十五日

晴、九十二度八分、長谷川第三艦隊司令長官は本日午後六時より揚子江口、汕頭間六百八十海里間の支那公私船一切の交通遮斷を爲す旨宣言す。

八月二十八日

晴、九十度一、午後四時本社階上にて皇軍必勝表忠記念會を開く、社

長以下五名先づ社前にて記念撮影をなし、君ヶ代合唱、教育勅語を捧讀し、次に謹んで大元帥陛下萬歳、皇軍萬歳を大聲三唱し、野戦料理を肴に祝杯を擧ぐ、十分に時局談を花咲かせ午後八時社長十八番の詩吟を以て散會す。

八月二十九日

晴、陸軍省發表、將校の特別志願制度を擴大し、國軍の強化を計る。午後五時、支那とソ聯との不可侵條約成立す。

八月三十日

皇軍へ萬歳且激勵及國民に望む文章を印刷し、各方面に發表す、午後四時、兩國驛に至り出征軍人の歡送激勵をなす。

八月三十一日

晴、夕方久振りに俄雨あり稍涼し、午後七時より、十時迄上野驛に至り出征軍人の歡送激勵をなす、國民の熱誠、白熱に達し構内外に溢れ唯ワーツと數萬の人聲相和し實に壯觀を極む、殊に午後八時四十分金澤師團行臨時急行の頃は物凄き人出、歡呼の聲は堂を搖がし、天を壓し、其意氣未だ戦はざるに敵地四百余洲を併吞するの慨あり、金澤師

團は社長の現役在營地として特に熱誠を罩めて歡送激勵す。

九月一日

晴、九十度、本日は大震災十四周年記念日につき午前十時本所區の震災記念堂へ參詣し燒香、厚く冥福を祈り、引續き同所正門前にて二時間余交通徳の普及實行をなす、人出陸續として絶えず、正面の大柱には「忘るなあの時、備へよこの時」「ゆるむ心のネヂをまけ」の大警句を見る。

九月二日

晴、九十度午後一時芝公園廣場に於て對支同志會主催の暴支膺懲國民大會開かれ、社長は在郷將校の武裝姿に鐵兜を冠り來賓として入場、一條公、菊地中將、南郷少將等と列席す、劈頭皇居遙拜の際、熱誠溢れて左手の指先より鮮血逆る、來會者約一萬頗る盛會を極む。

九月三日

第七十二回臨時議會本日召集さる、支那事變の臨時軍事費廿二億二千二百七十萬圓也、日清戦争の頃は僅か全部で二億圓なりし由、隔世の

感あり。

九月四日 北支の察哈爾省獨立し本日察南自治政府成立す。

九月五日 正午、海軍省發表、帝國政府は全支沿岸一帯に涉り、支那船の航行遮斷をなす旨發表す、即時實施さる。

九月六日 政府は戦局重大につきオリンピック大會準備取止の聲明をなす、當然の事なり。

九月十一日 午後七時、日比谷公會堂に於て政府主催の國民精神總動員大演說會開催され、近衛首相、馬場内相、安井文相の大雄辯あり、盛大なり。

九月十四日 米國政府は日支兩國へ武器輸送を禁ずるの命令を發す。

九月十五日 陸軍省發表左の如し。

北支方面最高指揮官 寺内壽一大將

上海方面最高指揮官 松井石根大將

本日午前八時より關東防空大演習開始さる、戦時体制下の折柄とて全員特に緊張す、社長は天光義勇隊長として軍服に鐵兜を冠り武裝勇しく見學、指導、激勵に東奔西走す。

九月十九日 午前八時、五日間に涉る防空大演習終了す、社長は本郷第五分團防毒班員一同と共に目覺しく活躍し記念撮影をなす。

九月二十二日 南京遂に大空爆を受け、敵の軍略中心地破壊さる。

九月二十三日 秋季皇靈祭、午前十時社長は在郷將校の軍服に鐵兜を冠り宮城二重橋前に至り、最敬禮をなし天皇、皇后兩陛下萬歲、大日本帝國皇軍萬歲を大聲高唱す、時恰も文武大官連の宮中退出に際會し、其儘一々敬意を表す、次に明治神宮に參拜し、皇軍必勝を祈願す、時に全國青年團代表の參拜あり、更に靖國神社に參拜同じく祈願す、記念として午後一時半神宮橋第一鳥居前にて撮影す。

九月二十四日 午前九時四十五分北支の中心地保定陥落す。

九月二十五日 町會主催の氏神櫻木神社前にて皇軍武運長久祈願式に午後一時參列、例の通り軍服姿にて宮城遙拜、皇室萬歲、皇軍萬歲を大聲三唱し、武運長久を祈る、社前に於ける號令指揮は社長之をなす、町會員、在郷軍人、防護團員、國防婦人會員、愛國婦人會員等三百余名極めて壯嚴を極む。

本日陸軍省發表、昨年之二、二六事件軍法會議の最後の判決あり、巨頭として起訴收容中の眞崎大將は証據不十分の理由を以て遂に無罪となる。

九月二十九日 上海戦線揚家沿にて敵屍体中、女學生三名あり、以て如何に支那軍の缺乏と支那女性の抗日熱強烈なるを思はしむ。

九月三十日 明治七年創立の牛込區市谷陸軍士官學校は六十四年の歴史を残し、神

奈川縣高座郡座間村へ移轉す。

午前九時秋雨沛然たる中を小石川區下富坂鈴木隆一君の出征を水道橋驛迄歡送す。

◎各方面よりの禮狀（順序不同、敬稱略す）

自昭和十一年四月分
至昭和十二年九月分

遞信大臣	永井柳太郎	步兵第一聯隊長	牛島滿
海軍大臣	米内光政	步兵第三聯隊長	湯淺政雄
前大藏大臣	結城豊太郎	歩兵中尉(石川縣)	角永敬次
前農林大臣	山崎達之輔	金澤市長	澤野外茂次
前商工大臣 兼鐵道大臣	伍堂卓雄	代議士	中島彌團次
前内務大臣	河原田稼吉	内田良平嗣子	内田治
司法大臣	塩野季彦	近衛歩兵獨立 機關銃隊	早川操
陸軍大將	菱刈隆	出征軍人の父 (千葉縣)	小倉清七
陸軍大將	西義一	出征軍人の妻 (秋田縣)	齋藤フジエ
陸軍大將	本庄繁	出征戦死の父 (茨城縣)	小島茂
第一師團長	河村中將		

歩兵少尉	太田主馬	横濱正金銀行	大町精二
警部補	泉年夫	日本赤十字本社	菅澤克巳
應召軍人	春山金重郎	出征軍人	山本新治
町會副會長	飯田貞之	同	輜重兵少尉 柴勝男
出征軍人	岩崎隆	同	増田道夫
同	甲田勇	同	田畑忠信
同	中島豊	同	高尾孫三郎
同	橋本信司	同	岩井權作
同	鈴木隆一	右の外出征軍人及其遺家族並に街頭交通者より口頭にて感謝を受けし事無慮千を越えしも一々其名を記憶せず、不得止略す。	
同	福岡清次郎		
同	二村精一		
同	中村一郎		

以上

◎波瀾 萬狀 私の半生物語

社長 柴田外吉

○私の出生

天下の三名公園の一である兼六公園の所在地、加賀百二十萬石の舊城下町即ち石川縣金澤市橋場町三十一番地臥龍山麓を流る、清流淺野川畔、菅公筆墨學用品卸問屋文林堂柴田久七の四男として明治二十年四月十六日（實際は八日生れと聞きました）呱呱の聲をあげました、時に父は四十一才、母は三十才、父の大厄の前年に生れたとの理由で外へ出した方がよいからとの事から其名を外吉とつけたそうです。

○おぼろげな幼年時代（六才まで）

神童か余程の強記でない限り本人は記憶ないのが普通と思ひます、私も一切知りませんが、唯一つ生死の境に遭つた事丈は未だに憶へて居ます、五才の頃夢圓らかに眠る眞夜中前一時頃突如半鐘が亂打され、家人は騒ぎ、けたましい音が物凄く鳴り、

私は何事ならんと飛び起き、非常窓をあけて外を見れば、こは如何に屋外は黒烟濛々として渦巻起り火焰はめら／＼と南方近く三十七番地方より此方へ襲ふて來ました之は大變と一人夢中で寢衣のまゝ、火事だ火事だと叫びながら外へ飛び出し數軒離れた向側の志村金物店の前で、暫く我家を見て居ましたが火熱の爲此處を去り、東側の材木町へ曲る角で踏み止り火勢如何にと半ば怖く半ば好奇心で見て居ましたが何しろ其頃稀な大火事として消防組や警官や避難者や民衆の殺到で押つぶされそうになり、家人とは離れ唯一人として聊か心細く感じて居ました折から消防小頭が來て此處は危いからとて北方を流る、淺野川の大橋を渡り橋畔の三味線屋へ連れて行きました、此家の人々は親切に色々といたわり慰めてくれましたから始めてホット安心しました、併しまだ／＼油斷は出來ません、市内の消防組全部（其時は舊式の手押しポンプ）で尙不足と見え、夜明け頃には遠く河北郡各村落の殆んど全消防組はポンプとマトイの掛聲勇しく駆付け、全力を盡して消火に努めたので翌朝十時頃漸く鎮火しました、焼失戸

數は橋場町全部、尾張町、下新町、材木町の一部とで合計百戸近くと憶えます、正午近く家人と親類の人々は火事最中も、鎮火後も方々探したが外吉一人が見當ず、多分逃遅れて焼死したのではないかと案じ、念の爲川向ふを探さんとて大橋を渡り始めての家が三味線屋であるので此處に居るとは露知らず一晚中心配したが、先づ無事で何よりと双方大に嬉し涙にくれました。

○ あごけなき少年時代 (七才より十四才まで)

イ、尋常小學校時代 (四學年制)

明治二十六年四月一日金澤市立西町尋常小學校へ七才で第一學年へ入學しました、受持教員は中村先生と青木先生何れも篤實な、善い教師で交代に教へてくれました、私は内氣な一人靜かに勉學する生徒であつたので、校長始め皆は可愛がりました、翌二十七年いよ／＼日清戦争が始り、唱歌の時間には殆んど軍歌ばかり歌ひました、世人は支那人をチャン／＼坊主、チャンコロと悪口しました、生徒一同の志氣は頗る興奮

し子供心にも戦勝を祈り、原田重吉の玄武門一番乗り、安城渡の松崎大尉、白神ラツバ手、等の勇しい忠勇美談を聞き自分も大きくなつて未來の武人となるやう憧れました、二十八年二月十一日紀元節の日松本校長先生から褒状(口繪参照)授與され、生れて始めて嬉しいと思ひました、私は首席を争ふ一、二番の秀才でないが、及落の分岐点にさまよう劣等生でなく何時も四、五、六番を占め優等生の末席丈は得てましたから及落の心配はなく順位の向上を争ふ方の生徒でありました。同窓生の中一人飛切り頭の善い生徒が居ました、名は下村定とてイツモ首席である斗りでなく、學年を二度も飛び越え僅か二ケ年で四ケ年限の尋常小學校を卒業し、其後の進境著しく昨昭和十一年には陸軍少將閣下に榮進したと聞き流石に故あるかなと感服しました。

ロ、高等小學校時代 (四學年制)

明治三十年四月一日市立金澤高等小學校へ入學しました。

受持教員は村田直太郎先生、河崎先生、中宮先生、齋藤先生の四人丈記憶して居ます。村田先生は眞面目な數學得意の人後に縣立第二中學校教諭となる、中宮先生も篤實な先生、河崎先生こそは教授振り正に満点何科目を教へても興味津津々生徒をして少しも退屈させず實に天才肌の良先生なりしが可惜若くして他界さる、嗚呼河崎先生!!呼べど答へず、其靈を慰む、同窓生中私と殆んど同順位の三浦敏事は其頃より目的を變更せず軍人を志願し遂に昭和十一年には陸軍少將閣下となる、少年時代の立志目標を變更せず終始一貫せし点に敬服する、此時代は日清戦争後の所謂臥薪嘗膽の頃として生徒一同の士氣も旺盛、例により唱歌の時間には軍歌多く、或時の如きは海軍の一下士官來校し講堂で軍事普及を講話し、勇敢なる水兵の軍歌を盛に歌つた、私は此軍歌は大好で全文を暗記し、四十年後の今日尙其大部分を暗誦する事が出来る、其他道は六百八十里、天に代りて不義を打つ、四百余洲を擧る十萬余騎の敵、等々の軍歌頗る流行し、殊に私は肉聲に十分自信ある爲、卒先して音頭を取りました、其頃金澤市連合の

小學校運動會は春秋二回西方二里半を隔てる日本海の海岸金石、大野の濱原で行はれ服装は和服ながら袴の股立勇しく草靴をはき辨當は西郷擔ぎ（肩から斜に腋の下へ結ぶ）としラツパの聲も凜々しく二里半の道を突破し潮風荒る、日本海岸で活潑に行はれ其前夜の如きは嬉しさに寝られぬ程でした、私も次第に快活な生徒となり、軍歌と体操とはイツモ満点、數學（算術）も殆んど満点、只習字は右の人指指が充分安着せず幾分ふるへる（別に不具に非ず）爲イツモ八十点内外で記憶一点張りの學科は九十五点内外であつた。放課後の運動は角力と戦ひごっこ、水泳で殊に水泳は自己流ながらよく雨降り後の淺野川の奔流を目がけて飛込み無事五百米余を泳いだり、角力は淺野川の河原に砂地の所へ土俵を拵へて近所の少年等とよく取り、体が小さくても（少年時代は比較的小柄なり十八才頃より追付き二十一才の時漸く一人前の五尺四寸となる）機を見るに敏なる私は相手の足をすくひ上げて十人中八人迄を負かした、大く例を取れば東京大相撲の明治時代の手取名力士荒岩のやうであつた。

明治三十一年十一月三十日石川縣知事より賞與され賞狀（口繪參照）を授與されました。大分性質も快活となり、腕白小僧らしくなつてもまだ模範兒童即ち優等生の資格あるかと大に嬉しく思ふ、同三十三年三月即ち三年生の修業試験最中今回我金澤市に甲種程度商業學校創立され豫科二ケ年本科三ケ年計五ケ年限入學資格は本科は高等小學四年卒業者又は中學二年修業者豫科は高等小學校二年修業者であるが創立の第一回入學者に限り本科は高等小學校卒業者以外特に三年修業者でも選抜試験に依り合格するものには入學を許す特典發表された爲め、一ケ年早く即ち高等小學三年修了にて受験し幸に私と親友澤野佐七（今の金澤市長の兄）と二人丈合格し他の年長先輩者等に伍して同年四月一日金澤商業學校第一回新入學生となる。

◎征寒征暑苦學力行の學生時代

（十四才より十七才まで）

幸に一年早く商業學校へ入學したが何しろ十九才、十八才、十七才、十六才、十五才等

の年長者計り、學歴も夫に準じて上の者計り、差當り私の急務は短時日の間に是等の者に追付く必要あり、先づ英、漢、數の三科目は學校以外特に放課後専門の教師宅へ學びに通ひました、英語は米國歸りの平岩先生の自宅へ出羽町練兵場の積雪を踏破して通ひ歸途は日暮れて吹雪烈しく親友澤野佐七と互に勵し合ひながら、切々と勉學しました、漢文は一人で兒玉小路の青木先生の自宅へ行き數學も一人で大手町の天野先生の許へ通ひ、日夜孜々として苦學し、其効空しからず、一年の三學期頃には他の學生と劣る所ない許りでなく成績も中の上に位するを得、始めて一安心しました。小學校より一轉して最新の科目多き商業學校とて萬事一新し、校長永野耕造、教頭中野觀象の如き東京一橋を卒業し新知識を振り廻すのみならず、服裝の如きも最新式紳士の背廣服に裝飾又當時のハイカラの尖端をなせる爲、從來金澤市の教師諸君は殆んど黒の詰襟服着用の折柄として、他校の者迄驚き其進歩的生活、教授科目に注目するに至つた、夏服も始て霜降りの藍色（中學生等は當時白服）を着用した、校舎は假校舎とし

て兼六公園内の成巽閣を借用し、次年度には市の公會堂へ移轉し、日夜螢雪の苦學をなし、一生懸命、他日雄飛の素地を作りました家に歸れば男兒多き爲め小店員の代りに私が丁度十五、六才の使ひ頃であるので、よく家業の手傳をさせられ、黙々として働きました、私は今でも比較的無口ですが少年學生時代は特に不言實行主義でした、學科は平均中の上ですが只習字殊にペン字が不器用でイツモ辛うじて七十点内外ですから、之を上達するやう極力工夫しましたが或る程度以上にはどうしても上達しませんが、之は掌指の裏面に脂肪分のない體質と右の人指指が急ぐ時にふるふる性質との原因である事が判り其後は特別の努力は徒勞と知り成行に任せました。商業學校の特色の一として外國語は最も重きを置かれ、英語は中學生の數等上にあり、其他私は支那語を一ケ年、露西亞語を二ケ年ミツシリ勉強しました、運動の方は得意中の得意雪國とて其頃野球は殆んどなく、劍道と角力と、教練、(豫備歩兵大尉佐久間先生と下士官富松先生)と体操に熱中しました、或時劍道試合(三本勝負)に優勝し竹刀一本を

賞品として貰つた時は嬉しかった、劍道教師は國下先生と記憶する、親友澤野佐七は器械体操は上手であつた、長身瘦軀の故かも知れん、私は自宅で鐵亞鈴で腕力をつけてあるから器械体操は易々と出来ました、かくて三ケ年も過ぎ同三十六年三月末中等の成績で第一回卒業しました。時に十七才。同窓生中、大町精二は快男兒後に海外に雄飛して羽翼を延ばし、松村太二郎は篤實重厚後に郷里實業界の重鎮となり、西川與一郎は才子肌後大阪實業界に巾を利かし、澤野佐七は機敏郷里實業界に落ちつきを見せ、其他夫々相當の成功者となつて居るが、唯一人私丈は營業は下手と見え無名の一人商人にすぎず、其代り盡忠報國の一点に就ては人後に落ちず、同窓生現存者中唯一人の在郷將校であり、更に天光社長として全國民進んで全人類の精神教育をなさんとする熱烈無比の今や其途中にあるのであります。

(つゞく)

◎天光社々則

○目的及事業

第一條

本社ハ歴代天皇ノ宏大無邊ナル天恩ノ奉謝ヲ經トシ太陽旭光ノ高大無限ナル光恩ノ禮讚ヲ緯トスル天光道ト稱スル極メテ穩健中正ニシテ而カモ最高權威アル思想精神道德ヲ祖國並ニ全世界ニ普及シ以テ全社會ヲ常ニ明朗平和ニナシ國民並ニ全人類ノ幸福ヲ計ルヲ目的トス

第二條

本社ハ前條ノ目的ヲ達スル爲メ先ツ左ノ事業ヲ逐次行フ

- 一、「健康部」ヲ設ケ先ツ健康第一ヲ主トシテ每朝皇祖皇宗ノ神靈ニ對シ奉リ謹ンデ拜禮シ護國ノ諸神並ニ我家ノ祖先ノ靈ニ對シ敬禮シ旭光ヲ拜浴シ教育勅語ヲ捧讀シ又各種ノ天光的運動ヲ行フ
- 二、「出版部」ヲ設ケ圖書並ニ雜誌「天光」ヲ發行シ天光道ノ普及宣傳ヲ行フ
- 三、「講演部」ヲ設ケ各方面ノ名士ニ依頼シテ天光道ノ普及講演ヲナス
- 四、「相談部」ヲ設ケ不幸煩悶アル各方面ノ人々ノ平和解決ヲ計リ共存共榮ヲ計ルモノトス

五、「正貫部」

ヲ設ケ正義ヲ貫ク天光義勇隊ヲ組織シ合法的熱烈無比ノ言論文章身ヲ以テ範ヲ示シ且實踐躬行等ヲ以テ道德上ノ不正ヲ擊滅シ正義ノ必勝ヲ斷行ス

右ノ外必要ニ應シ各種ノ事業ヲ行ハントス

○名稱及事務所

第三條

本社ハ天光社ト稱ス

第四條

本社ハ本部ヲ皇國の首都東京市ニ置キ逐次全國ニ支部ヲ設置ス

○會 員

第五條

本社ノ目的及事業ニ共鳴シテ入會スル方ヲ正會員トス

- 一、入會セントスル方ハ住所芳名ヲ正記シ入會金一圓ヲ添へ本社宛申込マレタシ

二、正會員ヘハ圖書「天光道」ト「天光章」ヲ贈呈ス

- 三、其翌月ヨリ雜誌「天光」代トシテ一月十錢宛（一年分前納ハ一圓）拂込マレタシ

○贊助員

第六條

本社ノ目的事業ニ賛成シ基金援助下サル贊助員ハ左ノ三種トス

- 一、正贊助員ハ一時金五圓以上ヲ贊助下サル方トス 正贊助員ヘハ「天光旗」ト「天光章」ヲ贈呈ス
 - 二、特別贊助員ハ年贊助金拾圓以上ヲ贊助下サル方トス年贊助金ハ拾箇年ヲ一期トス 特別贊助員ヘハ「天光旗」ト「特別天光章」ヲ贈呈ス
 - 三、名譽贊助員ハ一時金百圓以上ヲ贊助下サル方トス 名譽贊助員ヘハ「金色額面天光旗」ト「名譽天光章」ヲ贈呈ス
- 右各贊助員ヘハ圖書「天光道」ト雜誌「天光」ヲ贈呈ス、其他各會合ニ招待ス

○全社員

第七條

本社ハ一切ノ社務ヲ處理スル爲左ノ社員ヲ必要ニ應シ遂次置ク

- 總裁 一名 副總裁 一名 顧問 若干名
 - 社長 一名 副社長 一名 社員 若干名
- 第八條 總裁並ニ副總裁ハ本社ヨリ推戴ス

第九條

社長ハ社務一切ヲ指揮監督ス 副社長ハ社長ヲ補佐シ社長支障アル場合ニ於テ其職務ヲ代理ス 社員ハ社長ノ命令ニ服從シ各其分担事務ヲ處理ス

第十條

將來必要ニ應シ社則ヲ追加訂正スルコトアルベシ

東京市本郷區眞砂町三十七番地

皇紀二五九五年
昭和十年 一月一日創立
西曆一九三五年

天光社本部

電話小石川(80) 六〇三六番
振替東京三五三〇五番

◎時局重大の秋

貴家のため
祖國のため
全人類の爲

奮つて

御贊助
御入會

を乞ふ

至誠熱烈無比 社長 正八位 柴田外吉 謹白

○贊助員及表贊意家芳名錄

(順序不同) 昭和十二年十月一日現在

- 陸軍大將 陸軍大將 陸軍大將
- 林 銑十郎閣下
- 鈴木 六閣下

味ノ素	昭和	大日本圖書株式會社	日本火災保險株式會社	王子電氣軌道株式會社	東京書籍株式會社	日魯漁業株式會社	貴金屬商	全石福力本	全石野次郎	全山崎商	全東京中央郵便局長	東京驛長	成光館	主婦之友社	富山房
鈴木	銀行	株式會社	株式會社	株式會社	株式會社	株式會社	本店	本店	本店	本店	本店	本店	本店	本店	本店
前區議	郵便局長	培風館	丸善重役	東京隆	北隆	東隆	大東	啓文社	一誠堂	大京堂	同文館	博報堂	平凡社	通文閣	泰文堂
橫井武次郎	角永敬	山本慶治	大野甚平	福田良太郎	川合	關合	生龍太	酒井泰	神谷	菊池嘉三	島田嘉三	下田三	武井	篠崎	篠崎
殿	殿	殿	殿	殿	殿	殿	殿	殿	殿	殿	殿	殿	殿	殿	殿

鐘淵紡績株式會社	三菱合資會社	大川合會	三井銀行	日興業株式會社	日本製鐵株式會社	中日製鐵株式會社
陸軍大臣	陸軍大臣	陸軍大臣	陸軍大臣	海軍大臣	遞信大臣	伯子
鈴木	菱田	有田	永阿	室戶	井柳	馬中
木孝	劉國	重閣	隆閣	橋閣	郎閣	直閣
下	下	下	下	下	下	下
殿	殿	殿	殿	殿	殿	殿

太陽堂 機械工業 出版業 東洋書籍 文録社 巧藝社 裳華房 教育俱樂部 中央工學會 養賢堂 東洋書院 百貨店協會 圖書卸商 貢文堂 辯護士

照井健吾 西岡功 神谷勵 築館武 福神和 篠崎仙 藤崎四郎 田村仁太郎 中治郎 及川伍三 柳沼武俠 森島三郎 松村德義 田原清作 安江公平

眞珠商 御木本幸吉 郷軍神田分會長 藤田茂一郎 印刷業 太田文持 敬文堂 竹内淳郎 大周社 佐藤 厚生閣 岡本正一 東京辭書出版株式會社 磐城炭礦株式會社 東京瓦斯株式會社 淺野セメント株式會社 中央火災傷害保險株式會社 竹中工務店東京支店 銀行員 鈴木善雄 株式會社 資生堂 麒麟ビール會社東京支店 福壽生命東京支店

出版業 新日本社 實業之日本社 大倉書店 大町精二殿 目黒甚七殿 北澤書店 古田小作殿 小川鐵之介殿 齋藤熊三郎殿 新條初五郎殿 南條初五郎殿 前田重藏殿 山崎精一殿 有精堂 出版業 聚文館

青木政治殿 雄風館殿 山崎精一殿 前田重藏殿 南條初五郎殿 齋藤熊三郎殿 小川鐵之介殿 古田小作殿 北澤書店 目黒甚七殿 大町精二殿 大倉書店 大町精二殿 銀行員 東京書籍商 組合組長 古書籍商 萬代家 文川堂 崇文堂 東雲堂 共立社 邦光堂 有精堂 出版業 聚文館

金澤市 別所吉太郎殿 金澤市 森岡武吉殿 全 松村太郎殿 全 津田猪平殿 全 澤野佐七殿 全 谷村啓吉殿 全 織田巧次殿 全 金子次殿 以上 (前卷に發表濟の方は畧す) 右の各位に對し謹んで感謝し更に時局重大の折柄一層の御健勝を祈り且つ御後援願ひます。

昭和十二年 菊薫る仲秋の日

天光社本部

◎ 全會員に至急御願ひ ◎

雑誌「天光」の發行が遅れてすみません、
之から年四回以上は極力發行したいと思ひますから何卒十分御諒解願ひます。
就ては甚だお手数ですが、最初御入會の際に入會金一圓丈御拂込のお方は本年度分會
費金一圓を至急御送金下さるやう、特にお願ひ申します。
尙時局いよゝゝ重大の折柄一層の御健勝を神かけて祈ります。

昭和十二年秋上海、北支の大勝を祝ひつゝ、

天光社本部

◎ 編輯局より

- 一、惡戦に苦闘を重ねて漸く育てた本書です
から、萬事不行届ですが逐次改善して行
きますから何卒將來の大成を樂みに讀ん
で下さい。
- 二、内容の特色は正しく熱烈無比を旗印とし
てありますから、○○の他は一切假名を
使ひません凡て正義其物です。
- 三、豫算即ち兵站部不十分の爲未だ月刊に出
來ません、止むを得ず當分叢書の形式で
不定期に發行します、不惡御諒承下さい。
- 四、讀者各位の御健勝と御成業を誠意を以て
祈ります。

昭和十二年十一月四日印刷
昭和十二年十一月十日發行

天表忠奮戦の巻 定價五十錢

編輯兼 柴 田 外 吉
發行所 東京市本郷區眞砂町三十七番地

印刷所 東京市神田區旭町三番地

印刷所 文持堂印刷所

東京市本郷區眞砂町三十七番地

發行所 天光社本部

電話小石川六〇三六番
振替東京三五三〇五番

陸軍大將 鈴木孝雄閣下 題字
陸軍大將 田中國重閣下 題字

○在郷將校天光社長
○昭和の高山彦九郎
柴田外吉 決死編輯

天光 出陣の巻

口繪寫真 四頁 全文六十頁
表紙 旭日 昇天 意氣 衝天
正價 金二十五錢 送料三錢

◀ 呈獻謹 ▶
閑院參謀總長宮殿下
梨本元帥宮殿下
伏見軍令部總長宮殿下
東久邇中將宮殿下
朝香中將宮殿下
秩父少佐宮殿下

(順列軍年一十和昭ネ概)

- 次 目 容 内 —
- ▽ 卷 頭 創刊の辭
 - ▽ 天光道(其一) 社長柴田外吉
 - ▽ 元首美談、盡忠美談、警官美談
 - ▽ 工場美談、女性美談、少年美談
 - ▽ 醫師美談、床屋美談、官吏美談
 - ▽ 血涙受難物語、社長の畧歴
 - ▽ 出陣日記、創立日記、天光社則
 - ▽ 天光俳句、社長の正装と天光旗
 - ▽ 大 匠 名 士 よりの 禮 状
 - ▽ 贊助員、表贊意家芳名録、其他

今や時局重大、思想精神界總動員の秋
西園寺元老、近衛首相を始め國民を擧げ
て必ず熟讀を要する熱烈無比天下無二の
雜誌なり、書店になし直接御申込を乞ふ。

◎ 發行所

東京本郷區
眞砂町三七

電話東京三五三〇五番
小石川六〇三六番

天光社本部

陸軍大將	林 銑十郎閣下	題字
陸軍大將	菱川 隆閣下	題字
陸軍大將	鈴木 莊六閣下	題字
海軍大將	有馬 良橘閣下	題字
逓信大臣	永井 柳太郎閣下	題字

並に賛意激勵玉章

▼▼▼
 歴代天皇の宏大無邊なる天恩の奉謝を經とし太陽旭光の高大無限なる光恩の禮讃を緯とする最も穩健中正にして而かも最高權威ある新時代に即せる思想精神にて熱烈無比

◎特典
 此際五部以上前金申込の方へは天光章を拾部以上前金申込の方へは天光章と天光旗を記念として進呈す



天光道

天光社長 正八位柴田外吉謹著 四六判口繪寫真入上製全一冊 正價金五十錢 送料六錢
 ◎上は宰相より下一匹夫に至る迄國民を擧げて必ず熟讀且直に實行せねばならぬと敢て御勸めする空前にして恐らく絶後の聖典と確信します何卒一刻も早く直接申込あれ

發行所 東京本郷區 振替東京三五三〇五番 電話小石川六〇三六番 天光社本部
 眞砂町三七

終